

# 食魔

岡本かの子

青空文庫



菊萵苣きくぢさと和名はついているが、原名のアンディーヴと呼ぶ方が食通の間には通りがよいようである。その蔬菜そさいが姉娘のお千代の手で水洗いされざる箆ざるで水を切つて部屋のまま中の台俎板だいまないたの上に置かれた。

素人の家にしては道具万端整つている料理部屋である。ただ少し手狭なようだ。

若い料理教師の鼈べつしろう四郎は椅子いすに踏み反り返り煙草たばこの手を止め、戸外の物音を聞き澄ましている。外では初冬の風が町の雑音を吹き靡なびけている。それは都会の木枯しとでもいえそうな賑にぎやかで寂しい音だ。

妹娘のお絹はこどものように、姉のあとについて一々、姉のすることを覗いて来たが、今は台俎板の傍に立って笹の中の蔬菜を見入る。蔬菜は小柄で、ちようど白菜を中指の丈けあまりに縮めた形である。しかし胴の肥り方の可憐で、貴重品の感じがするところは、譬えば露の臺といったような、草の芽株に属するたちの品かともおもえる。

笹の目から滑った蔬菜の雫が、まだ新しい台俎板の面に濡木の肌の地図を浸み拡げて行く勢いも鈍って来た。その間に、棚や、戸棚や抽出しから、調理に使いそうな道具と、薬味容れを、おずおず運び出しては台俎板の上に並べていたお千代は、並び終えても動かない料理教師の姿に少し不安になった。自分よりは教師に

容易く口の利ける妹に、用意万端整ったことを教師に告げよと、目ませをする。妹は知らん顔をしている。

若い料理教師は、煙草の喫い殻を屑籠くずかごの中に投げ込み立上つて来た。じろりと台俎板の上を見互みわたす。これはいらんという道具を二三品、抽ぬき出して台俎板の向う側へ黙もくつて抛ほうり出した。

それから、筴の蔬菜を白磁の鉢の中に移した。わざと肩肘かたひじを張るのではないかと思えるほどの横柄な所作は、また荒つぽく無雑作に見えた。教師は左の手で一つの匙さじを、鉢の蔬菜の上へ控えた。塩と胡椒こしょうと辛子からしを入れる。酢を入れる。そうしてから右の手で取上げたフオークの尖さきで匙の酢を掻かき混ぜる段になると、急に神経質な様子を見せた。狭い匙の中でフオークの尖はミシン機

械のように動く。それは卑劣と思えるほど小器用で脇の下がこそばゆくなる。酢の面に縮緬皺ちりめんじわのようなさざなみか果てしもなく立つ。

妹娘のお絹は彼の矛盾にくすりと笑った。鼈四郎は手の働きは止めず眼だけ横眼にじろりと睨にらんだ。

姉娘の方が肝が冷えた。

匙の酢は鉢の蔬菜の上へ万遍まんべんなく撒まき注がれた。

若い料理教師は、再び鉢の上へ銀の匙を横へ、今度はオレフ油を鑊びんから注いだ。

「酢の一に対して、油は三の割合」

厳かな宣告のようにこういい放ち、匙で三杯、オレフ油を蔬菜

の上に撒き注ぐときには、教師は再び横柄で、無雑作で、冷淡な態度を採上げていた。

およそ和あえものの和え方は、女の化粧と同じで、できるだけ生地じの新鮮味を損そこなわないようにしなければならぬ。掻き交ぜ過ぎた和えものはお白粉しろいを塗りたくった顔と同じで気韻きいんは生動しない。

「揚ものの衣の粉の掻き交ぜ方だつて同じことだ」

こんな意味のことを喋しゃべった鼈四郎は、自分のいったことを立証するのように、鉢の中の蔬菜を大ざつぱに掻き交ぜた。それでいて蔬菜が底の方からむらなく攪かくらん乱されるさまはやはり手馴てなれの技ぎ倆りようらしかった。

アンデューヴの戻莖の群れは白磁の鉢の中に在つて油の照りが

行互り、硝子越ガラスごしの日ざしを鋭く撥はね上げた。

蔬菜の浅黄いろを眼に染しませるように香辛入りの酢にが匂におう。それは初冬ながら、もはや早春が訪れでもしたような爽さわかさであった。

鼈四郎は今度は匙をナイフに換えて、蔬菜の群れを鉢の中のまま、ざつと截きり捌さばいた。程のよろしき部分の截片うかがを覗のぞつてフオークでぐざと刺し取り、

「食つて見給え」

と姉娘の前へ突き出した。その態度は物の味の試しを勧めるといふより芝居でしれ者が脅おどしに突出す白刃おどに似ていた。

お千代はおどおどしてしまつて胸をあとへ引き、妹へ譲り加減



に妹の方へ顔をそ向けた。

「おや。——じゃ。さあ」

鼈四郎はフオークを妹娘の胸さきへ移した。

お絹は滑らかな頸くびの奥で、喉頭こうとうをこくりと動かした。煙るよ  
うな長い睫まつげの間から瞳ひとみを凝らしてフオークに眼を遣やり、瞳の焦点  
が截片あたに中ると同時に、小丸い指ゆび尖さきを出してアンディーヴを撮つま  
み取った。お絹の小隆い鼻の、種子たねの形をした鼻の穴が食欲で拡  
がった。

アンディーヴの截片はお絹の口の中で慎重に噛み砕かれた。青あ  
おずおずっぱ  
酸いい滋味が漿しょう液えきとなり嚙のみ下くだされる刹那せつなに、あなやと心  
をうつろにするうまさがお絹の胸をときめかした。物憎いことに

は、あとの口腔こうこうに淡い苦味が二日月ふつかづきの影のようにほのかにとどまったことだ。この淡い苦味は、またさつき喰たべた昼食の肉の味のしつこい記憶を軽く拭ふき消して、親しみ返せる想おもい出にした。アンデューヴの截片はこの効果を起すと共に、それ自身、食べて食べた負担を感じせしめないほど軟く口の中で尽きた。滓かすというほどのものも残らない。

「口惜しいけれど、おいしいわよ」

お絹は唾液だえきがにじんだ唇くちびるの角を手の甲でちよつと押えてこういつた。

「うまかろう。だから食ものは食ってから、文句をいいなさいというのだ」

鼈四郎の小さい眼が得意そうに輝いた。

「ふだん人に難癖をつける娘も、僕の作った食ものうまさには一言も無いぜ。どうだ参ったか」

鼈四郎は追い討ちしていい放った。

お絹はりようそで両袖を胸へ抱え上げてくるりと若い料理教師に背を向けながら、

「参ったことにしとくわ」

と笑い声で応じた。

ふだん言葉かたき同志の若い料理教師と、妹との間に、これ以上のうるさい口争いもなく、さればと行って因縁を深めるような意地の張り合いもなく、あつさり済んでしまったのをみて、お千

代はほつとした。安心するとこの姉にも試しに食べてみたい気持ちがこみ上げて来た。

「じゃ、あたしも一つ食べてみようかしら」

とよそ事のようにいいながらそつと指尖を鉢に送つて小さい截片を一つ撮み取つて食べる。

「あら、ほんとにおいしいのね」

眼を空にして、割烹衣かっぽういの端で口を拭ぬぐつてお千代は少し顔を赭あからめた。お絹は姉の肩越しに、アンデューヴの鉢を覗き込んだが、

「鼈四郎さん、それ取つといてね、晩のご飯のとき食べるわ」  
そういった。

まきたばこ  
巻煙草を取出していた鼈四郎べつしろうはこれを聞くと、煙草を口に  
銜くわえたまま鉢つかを掴み上げ臂ひじを伸して屑箱くずばこの中へあけてしまった。  
「あらッ！」

「料理だつて音楽的のものさ、同じうまみがそう晩までも続くも  
のか、刹那せつなに充実し刹那に消える。そこに料理は最高の芸術だと  
いえる性質があるのだ」

お絹は屑箱の中からまだ覗のぞいているアンディーヴの早春の色を  
見遣みやりながら

「鼈四郎の意地悪る」

と口惜しそうにいった。「おとうさまにいいつけてやるから」  
と若い料理教師を睨にらんだ。お千代も黙つてはいられない気がして

妹の肩へ手を置いて、お交際つきあいに睨にらんだ。

令嬢たちの四つの瞳ひとみを受けて、鼈四郎はさすがに眩まぶしいらしく小さい眼をしばたいて伏せた。態度はいよいよ傲慢ごうまんに、肩かたひ肘張じって口の煙草にマツチで火をつけてから

「そんなに食つてみたいのなら、晩に自分たちで作つて食いなさい。それも今のものでそつくりの模倣まぼじやいかんよ。何か自分の工く風ふうを加えて、——料理だつて独創が肝心だ」

まだ中に蔬菜そさいが残つている紙袋をお絹の前の台俎板だいまないたへ抛ほうり出した。

これといつて学歴も無い素人出の料理教師が、なにかにつけて理窟こを捏ね芸術家振りたがるのは片腹痛い。だがこの青年が身も

魂も食ものに殉じていることは確だ。若い身空で女の襷たすきをして漬つ物けもの樽のだるの糠加減ぬかかげんを弄いじつている姿などは頼まれてもできる芸ではない。生れ付き飛び離れた食くい辛棒しんぼうなのだろうか、それとも意趣があつて懸命にこの本能に縋すがり通して行こうとしているのか。

お絹のところに鼈四郎がいい捨てた言葉の切れ端よみがえが蘇よみがえつて来る。「世は遷うつり人は代るが、人間の食意地は変らない」「食ものぐらい正直なものはない、うまいかまずいかすぐ判る」「うまさということは神秘だ」——それは人間の他の本能とその対象物との間の魅力に就ついてもいえることなのだが、鼈四郎がいうとき特にこの一味だけがそれであるように受取らせる。ひよつとしたらこの青年は性情の片端者なのではあるまいか、他の性情や感覚や才能ま

で、その芽を挽ぎ取られ、いのちは止むなく食味の一方に育ち上った。鼈四郎が料理をしてみせるとき味利きということをしたことが無い。身体全体が舌の代表となっていて、料理の所作の順序、運び、拍子、そんなもののカンから味の調不調の結果がひとりで見分けられるらしい。食慾だけ取立てられて人類の文化に寄与すべく運命付けられた畸形な天才。天才は大概片端者だという。そういえばこの端麗な食青年にも愚かしいものの持つ美しさがあって、それが素焼の壺とも造花とも感じさせる。情慾が食氣にだけ偏ってしまつて普通の人情に及ぼさないためかしらん。

一ばん口数を利く妹娘のお絹がこんな考えに耽つてしまつていると、もはや三人の間には形の上の繋りがなく、鼈四郎はしきり



に煙草の煙を吹き上げては椅子いすに踏み反って行くだけ、姉娘のお千代は、居竦いすくまさされる辛つらさに堪えないというふうにくこそ料理道具の後片付けをしている。一しきり風が窓硝子まどガラスに砂ほこりを吹き当てる音が極きわ立たつ。

「天才にしても」とお絹はひとり言のようにいった。

「男の癖にお料理がうまいなんて、ずいぶん下卑げびた天才だわよ」と鼈四郎の顔を見ていった。

それから溜たまつたものを吐き出すように、続けさまに笑った。

鼈四郎はむつとしてお絹の方を見たが、こみ上げるものを飲み込んでしまったらしい。

「さあ、帰るかな」

としよんぼり立上ると、ストーヴの角に置いた帽子を取ると送りに立つた姉娘に向い

「きようは、おとうさんに会ってかないからよろしくつて、いつ  
といて呉くれ給え」

といつて御用聞きの入入り口から出て行つた。

靴の裏と大地の堅さとの間に、さりさり砂ほこりが感じられる  
初冬の町を歩いて鼈四郎は自宅へ帰りかかった。姉妹の娘に料理を教えに行く荒木家蛭雪館のある芝の愛宕台あたごだいと自宅のある京橋区の中橋広小路との間に相当の距離はあるのだが、彼は最寄もよりの

電車筋へも出ずゆつくり歩るいて行つた。

一つは電車賃さえ儉約の身の上だが、急いで用も無い身体である。もう一つの理由はトンネル横町と呼ばれる変つた巷路こうろを通り度たいたためでもある。

いずれは明治初期の早急な洋物輸入熱の名残りであろう。街の小道の上に煉瓦れんが積みのトンネルが幅広く架け渡され、その上は二階家のようにして住んでいるらしい。瓦屋根かわらやねの下の壁に切つてある横窓からはこどもの着ものなど、竹竿で干し出されているのをときどき見受ける。

鼠ねずみいろ色の瓦屋根も、黄土色の壁も、トンネルの紅色の煉瓦も、燻いぶされまた晒さらされて、すっかり原色を失い、これを舌の風味にし

たなら裸麦で作った黒パンの感じだと鼈四郎はいつも思う。そしてこの性を抜いた豪華の空骸なきからに向け、左右から両側になつて取り付いている二階建の小さい長屋は、そのくすんだねばねばした感じから、鵜つぐみの腸わたの塩辛のようにも思う。鼈四郎はわたりの風趣を強いて食味に翻訳して味わうのではないが、ここへ彼は来ると、裸麦の匂においや、鵜の腸にまで染しみている木の実の匂いがひとりでにした。佐久間町の大銀杏おおいちようが長屋を掠かすめて箒ほうきのように見える。

彼はこの横町に入り、トンネルを抜け横町が尽きて、やや広い通りに折れ曲るまでの間は自分の数奇の生立ちや、燃え盛る野心や、ままならぬ浮世うきよや、癩しやくに触る現在の境遇をしばし忘れて、鬣あとした気持いたになれた。それはこの上墜おちようもない世の底に

身を置くやす泰らかさと現実離れのした高貴性に魂を提げられる思いとが一つに中和していた。これを侘わびとでもいうのかしらんと鼈四郎は考える。この巷路を通り抜ける間は、姿形に現れるほども彼は自分が素直な人間になっているのを意識するのであった。ならば振り戻つて、もう一度トンネルを潜くぐることによつて、鬢鬚とした意識に浸り還かえせるかという、そうはゆかなかつた。感銘は一度限りであつた。引き返してトンネル横町を徘徊はいかいしてもただ汚らしく和洋蕪雜わようぶざつに混つている擬まがいものの感じのする街に過ぎなかつた。それゆえ彼は、螢雪館へ教えに通う行き来のどちらかにだけ日に一度通り過ぎた。

土橋を渡つて、西仲通りに歩るきかかるとちらほら町には灯が

入つて来た。鼈四郎はそこから中橋広小路の自宅までの僅わずかな道程を不自然な曲り方をして歩いた。表通りへ出てみたりまた横町へ折れ戻り、そして露路の中へ切れ込んだりした。彼が覗のぞき込む要所要所には必ず大小の食もの屋の店先があつた。彼はそれ等の店先を通りかかりながら、店々が今宵こよい、どんな品を特品に用意して客を牽ひき付けようとしているかを、じろりと見検めるのだつた。

ある店では、紋のついた油障子の蔭から、赤い蟹かにや大粒はまぐりの蛤はまぐりを表に見せていた。ある店では、シヨウウインドーの中に、焼串やきぐしに嶋しぎを刺して赤蕪あかかぶや和蘭芹オランダゼリと一しよに皿に並べてあつた。

「どこも、ここも、相変らず月並なものばかり仕込んでやがる。智慧ちえのない奴等ばかりだ」

鼈四郎は、こう呟くと、齒痒いような、また得意の色があつた。

そしてもし自分ならば、——と胸で、季節の食品月令から意表で恰好の品々を物色してみるのだった。

彼の姿を見かけると、食もの屋の家の中から声がかけられるのであつた。

「やあ、先生寄つてらっしゃい」

けれども、その挨拶振りは義理か、通り一遍のものだった。

どの店の人間も彼の当身の多い講釈には参らされていた。

「寄つてらっしゃいたつて、僕が食うようなものはありやしまいじゃないか」

「そりやどうせ、しがない垂簾の食もの屋ですからねえ」

こんな応対で通り過ぎてしまう店先が多かった。無学を見透されまいと、嵩かさにかかつて人に立向う癖が彼についてしまっている。それはやがて敬遠される基と彼は知りながら自分でどうしようもなかった。彼は寂しく自宅へ近付いて行った。

表通りの呉服屋と畳表問屋の間の狭い露路の溝板へ足を踏みかけると、幽かすかな音で溝板の上に弾はねているこまかいものの気配いがする。暗くなつた夜空を振り仰ぐと古帽子の鰐つばを外ずれてまたこまかいものが冷たく顔を撫なでる。「もう霰あられが降るのか。」彼は一瞬の間に、伯母から令押被おつかぶせの平凡な妻と小児を抱えて貧しく暮



している現在の境遇の行体が胸に泛び上った。いま二足三足の足の運びで、それを眼のあたりに見なければならぬ運命を思うと鼈四郎は、うんざりするより憤怒の情が胸にこみ上げて来た。ふと蛍雪館の妹娘のお絹の姿が倂に浮ぶ。いつも軽蔑した顔をして冷淡につけつけものをいい、それでいて自分に肌目のこまかい、しなやかで寂しくも調子の高い、文字では書けない若い詩を夢見させて呉れる不思議な存在なのだ。

「なんだって、自分はあるなに好きなお絹と一しよになり、好きな生活のできる富裕な邸宅に住めないのだろう。人間に好くという慾を植えつけて置きながら、その慾の欲しがるものを真つ直には与えない。誰だか知らないが、世界を慥えた奴はいやな奴だ」

その憤懣ふんまんを抱いて敷居またを跨ぐのだったから、家へ上つて行くときの声は抉えぐるような意地悪さを帯びていた。

「おい。ビール、取つといたか。忘れやまいな」

こどもに向き合い、五燭しよくの電灯の下で、こどもに一箸ひとはし、自分が二箸というふうにして夕飯をしたためていた妻の逸子は、自分の口の中のものを見悟られまいとするように周章あわてて嘔のみ下した。口を袖そでで押えて駆け出して来た。

「お帰りなさいまし。篤がお腹が減ったってあんまり泣くものですから、ご飯を食べさせていましたので、つい気がつきませんでして、済みません」

いいつつ奥歯ほおと頬ほおの間に挟った嘔のみ残しのものを、口の奥で仕

末している。

「ビールを取つといたかと訊きくんだ」

「はいはい」

逸子は、握り箸の篤を、そのまま斜に背中へ抛ほうり上げて負おぶうと、  
 霰の溝板を下駄で踏み鳴らして東仲通りの酒屋までビールを誂あつらえ  
 に行つた。

もう一突きで、カツとなるか涙をぼろつと滴すかの悲惨な界の  
 気持にまで追い込められた硬直の表情で、鼈四郎はチャブ台の前  
 に胡坐あぐらをかいた。チャブ台の上は少しばかりの皿小鉢が散らされ  
 抛り置かれた飯茶碗めしぢやわんから飯は傾いてこぼれている。五燭の灯の  
 下にぼんやり照し出される憐あわれな狼藉ろうぜきの有様は、何か動物が生

命を繋ぐつなことのために僅かなものを必死と食い貪る途中を闖入ちんにゅう者うしやのために追い退けられた跡とも見える。

「浅間しい」

鼈四郎は吐くようにこういつて腕組みをした。

この市隠荘はお絹等姉妹の父で漢学者の荒木蛍雪が、中橋の表通りに画帖や拓本を売る蛍雪館の店を開いていた時分に、店の家が狭いところから、斜向うのこの露路内に売家が出たのを幸、買取って手入れをし寝泊りしたものである。ちよつとした庭もあり、十二畳の本座敷などは唐木が使つてある床の間があつて瀟洒しょうしやとしてゐる。蛍雪はその後、漢和の辞典など作つたものが当り、利殖の才もあつてだんだん富裕になつた。表通りの店は人に譲り

邸宅を芝の愛宕山の見晴しの台に普請し、蛍雪館の名もその方へ持つて行つた。露路内の市隠荘はしばらく戸を閉めたままであつたのを、鼈四郎が蛍雪に取入り、荒木家の抱えのようになつたので、蛍雪は鼈四郎にこの市隠荘を月々僅な生活費を添えて貸与えた。但し条件附であつた。掃除をよくすること、本座敷は滅多に使わぬこと——。それゆえ、鼈四郎夫妻は次の間の六畳を常の住いに宛あてていたのであつた。一昨年の秋、夫妻にこどもが生れると蛍雪は家が汚れるといつて嫌な顔をした。

「ちつとばかりの宛がい扶持ぶちで、勝手な熱を吹く。いずれ一泡吹かしてやらなきや」

それかといつて、急にさしたる工夫もない。そんなことを考え

るほど眼の前をみじめなものに感じさすだけだった。

鼈四郎は舌打ちして、またもとのチャブ台へ首を振り向けた。

懐手をして掌を宛てている胃拡張の胃が、鳩尾みぞおちのあたりでぐうぐうと鳴った。

「うちの奴等、何を食ってやがったんだろう」

浅い皿の上から甘藷いもの煮ころばしが飯粒をつけて転げ出している。

「なんだ、いもを食ってやがる。貧弱な奴等だ」

鼈四郎は、軽蔑し切った顔をしたけれども、ふだん家族のものには廉価なものしか食べることを許さぬ彼は、家族が自分の掟通おきてりにしていることに、いくらか気を取直したらしい。

「ふ、ふ、ふ、いもをどんな煮方をして食ってやがるだろう。一つ試<sup>ため</sup>してみてやれ」

彼は甘藷についでる飯粒を振り払い、ぱくんと開いた口の中へ抛り込んだ。それは案外上手に煮えていた。

「こりや、うまいや、ばかにしとらい」

鼈四郎は、何ともいいようのないくすぐ擦ったような顔をした。

鬣を前髪のうしろに溜めて逸子が帰って来た。こどもを支えな  
い方の手で提げて来たビールびん壺を二本差出した。

「さし当ってこれだけ持って参りました。あとは小僧さんが届けて呉れるそうでございますわ」

鼈四郎はつねづね妻にいい含めて置いた。一本のビールを飲も

うとするときにはあとに三本の用意をせよ。かかる用意あつてはじめて、自分は無制限と豪快の気持で、その一本を飲み干すことができる。一本を飲もうとするときに一本こつきりでは、その限数が気になり伸々した気持でその一本すら分量の価<sup>ね</sup>打ちだけに飲み足らうことができない。結局損な飲ませ方なのだ。罍<sup>びんづめ</sup>詰のビールなぞというものは腐るものではないから余計とつて置いて差支えない。よろしく気持の上の後詰の分として余分の本数をとつて置くべきであると。いま、逸子が酒屋へのビール注文の仕方は、鼈四郎のふだんのいい含めの旨<sup>かな</sup>に叶うものであつた。

「よしよし」と鼈四郎はいつた。

彼は妻に、本座敷へ彼の夕食の席を設ることを命じた。これは



珍しいことだった。妻は

「もし、ひよつとして汚しちや、悪かございません？」と一応念を押してみたが、良人は眉をおっとびくりと動かしただけで返事をしなかつた。この上機嫌を損じてはと、逸子は子供をひも紐で負い替え本座敷の支度にかかつた。

畳の上には汚れ除けよの渋紙が敷き詰めてある、屏風びょうぶや長押ながげしの額、床の置ものにまで塵除けちりよの布ぶくろが冠かぶせてある。まるで座敷の中の調度が、住む自分等を異人種に取扱い、見られるのも触れられるのも冒瀆ぼうとくとして、極力、防避を申合せてるようであった。こうしてから自分等に家を貸し与えた持主の蛍雪の非人情をまざまざ見せつけられるようで、逸子には憎々しかつた。

彼女は復讐ふくしゅうの小気味よさを感じながらこれ等の覆いものを  
 悉く剥ぎ取ったことごとく。子供の眼鼻に塵ちりの入らぬよう手拭てぬぐいを冠かぶせとい  
 て座敷の中をぎつと叩たたいたり掃はたいたりした。何かしら今夜の良人おとと  
 の気分を察するところがあつて、電灯も五十燭しよくの球につけ替えた。  
 明煌あかりこうこう々と照り輝く座敷の中に立ち、あたりを見廻みまわすと、逸子も  
 久振りに気も晴々となつた。しかし臆おくし心の逸子はやはり家の持  
 主に対して内証の隠事かくしごとをしている気持が出て来て、永くは見廻し  
 ていられなかつた。彼女は座布団ざふたんを置き、傍にビール罎びんを置くと  
 次の茶の間に引下りそこで中断された母子の夕飯を食べ続けた。  
 この間台所で賑にぎやかな物音を立て何か支度しどをしていた鼈べつしろう四郎  
 は、襖ふすまを開けて陶器鍋とうきなべのかかつた焜こんろ炉ろを持ち出した。白いもの

の山型に盛られてゐる壺と、茶色の塊が入つてゐる鉢と白いものの横つてゐる皿と香のものと配置よろしき塗膳ぬりぜんを持出した。醬し油ようゆつ注ぎ、手塩皿、ちりれんげ、なぞの載つてゐる盆ひしを持出した。四度目にビールの栓せんぬ抜きとコップを、ちようど士さむらいが座敷に入るとき片手で提げるような形式張つた肘ひじの張り方で持出すと、洋服の腰に巻いていた妙な覆い布を剥ぎ去つて台所へ抛り込んだ。襖を閉め切ると、座敷を歩み過し椽側えんがわのところまで来て硝子障子ガラスしょうじを明け放した。闇の庭は電燭の光りに、小さな築山や池のおも影を薄肉彫刻のように浮出させ、その表を僅な霰わすかあられが縦に掠めて落ちている。幸に風が無いので、寒いだけ室内の焔炉の火も、火鉢の火も穏かだった。

彼は座布団の上に胡座あぐらを搔かくと、ビール罎びいるに手をかけ、にこにこしながら壁越しに向つていった。

「おい、頼むから今夜は子供を泣かしなさんな」

彼は、ビールの最初のコップに口をつけこくこくこくと飲み干した。掌で唇の泡を拭ぬぐい払うと、さも甘そうにうえーと暖気おくびを吐いた。その誇張した味い方は落語家の所作を真似まねをして遊んでいるようにも妻の逸子には壁越しに取れた。

彼は次に、焔炉えんろにかけた陶器鍋の蓋ふたに手をかけ、やあつと掛声してその蓋を高く擡もたげた。大根の茹ゆった匂においが、汁の煮出しの匂いと共に湯気を上げた。

「細工はりゆうりゆう、手並をごろうじろ」

と彼は抑揚をつけていったが、蓋の熱さに堪えなかつたものと見え、ち、ちちちといって、蓋を急ぎ下に置いた様子も、逸子には壁越しに察せられた。

じかに置いたらしい蓋の雫で、畳が損ぜられやしないか？ ひやりとした懸念を押しつけて、逸子におかしさがこみ上げた。彼女はくすりと笑った。世間からは傲慢ごうまん一方の人間に、また自分たち家族に対しては暴君タイラントの良人が、食物に係っているときだけ、温順おとなしく無邪気で子供のようでもある。何となくいじらしい気持が湧くのを泣かさぬよう添寝をして寝かしつけている子供のかず上に被けた。彼女は子供のちゃんちゃんこと着もの間に手をさし入れて子供を引寄せた。寝つきかかっている子供の身体は性な

く軟かに、ほっこり温かだった。

本座敷で鼈四郎は、大根料理を肴さかなにビールを飲み進んで行った。材料は、厨くりやで僅に見出した、しかも平凡な練馬大根一本に過ぎないのだが、彼はこれを一汁三菜の膳ぜんぐみ組に従って調理し、品附した。すなわち鱈なますには大根を卸しにし、煮物には大根を輪切にしたものを鰹かつおぶし節ふしで煮てこれに宛あてた。焼物皿には大根を小魚の形に刻んで載せてあった。鍋は汁の代りになる。

かくて一汁三菜の献立は彼に於て完まうしたつもりである。

彼には何か意固地いこじなものがあつた。富贍ふせんな食品にぶつかったときはひと種いづろで満足するが、貧寒な品にぶつかったときは形式美を欲した。彼は明治初期に文明開化の評論家であり、後に九代目団

十郎のための劇作家となつた桜痴居士福地源一郎の生活態度を聞知つていた。この旗本出で江戸っ子の作者は、極貧の中に在つて客に食事を供するときには家の粗末な惣菜そうざいのものにしろ、これを必ず一汁三菜の膳組の様式に盛り整えた。従つて焼物には塩しおじ鮭やけの切身なぞもしばしば使われたという。

彼は料理に關係する実話や逸話を、諸方の料理人に、例の高飛車な教え方をする間に、聞出して、いくつとなく耳學問に貯える。何かという場合にはその知識に加担を頼んで工夫し出した。彼は独創よりもどつちかという記憶のよい人間だった。

彼は形式通り膳組されている膳を眺めながら、ビールの合の手鍋の大根のちりを喰たべ進んで行つた。この料理に就つても、彼に

は基礎の知識があつた。これは西園寺陶庵公が好まれる食品だということであつた。彼は人伝ひとづてにこの事を聞いたとき、政治家の傍、あれだけの趣味人である老公が、舌に於て最後に到り付く食味はそんな簡単なものであるのか。それは思いがけない氣もしたが、しかし肯うなずかせるところのある思いがけなさでもあつた。そして彼には、いわゆる偉い人が好んだという食品はぜひ自分も一度は味ってみようという念願があつた。それは一方彼の英雄主義の現れであり、一方偉い人の探索でもあつた。その人が好くという食品を味ってみて、その人がどんな人であるかを溯さかのぼり知り当てることは、もつとも正直で容易い人物鑑識法のように彼には思えた。

鍋の煮出し汁は、兼かねて貯えの彼特製の野菜のエキスで調味され



てあつた。大根は初冬に入り肥えかかつていた。七つ八つの泡によつて鍋底から浮上り漂う銀杏形いちようがたの片れきの中で、ほど良しと思ふものを彼は箸はしで選み上げた。手塩皿の溜醬油たまりに片れの一角を浸し熱さを吹いては喰べた。

生きで純で、自然の質そのものだけの持つ謙遜けんそんな滋味が片れを口の中へ入れる度びに脆もろく柔く溶けた。大まかな菜根の匂いがする。それは案外あま、甘いものであつた。

「成程なア」

彼は、感歎かんだんして独り言をいった。

彼は盛に煮上つて来るのを、今度は立て続けに吹きもて食べた。それは食べるというよりは、吸い取るという恰好かっこうに近かつた。

土鼠が食い耽る飽くなき態があつた。

その間、たまに彼は箸を、大根卸しの壺に差出したが、ついに煮大根の鉢にはつけなかつた。

食い終つて一通り堪能したと見え、彼は焜炉の口を閉じはじめて霰の庭を眺め遣つた。

あまり酒に強くない彼は胡座の左の膝ひざに左の肘を突立て、もう上体をふらふらさしていた。噁気をしきりに吐くのは、もはや景気附けではなく、胃拡張の胃壁の遅緩が、飲食したものの刺激に遭いうねり戻す本ものものだった。ときどき甘苦い粘塊が口中へ噎むせ上つて来る。その中には大根の片れの生嚙なまがみのものも混つている。彼は食後には必ず、この噁気をやり、そして、人前をも

はばか 反芻する癖があつた。壁越しに聞いている逸子は「また、始めた」と浅間しく思う。家庭の食後にそれをする父を見慣れて、こどもの篤が真似て仕方が無いからであつた。

暖気は不快だったが、その不快を克服するため、なおもビールを飲み煙草を喫うところに、身体に非現実な美しい不安が起る。

「このとき、僕は、人並の氣持になれるらしい。妻も子も可愛がれる——」彼はこんなことを逸子によくいう。逸子は寝かしついたり子供に布団を重ねて掛けてやりながら、「すると、そのとき以外は、良人に蛍雪が綽名に付けたその鼈のような動物の氣持でいるのかしらん」と疑う。

鼈四郎は、煙草を喫いながら、彼のいう人並の氣持になつて、

霰の庭を味つていた。時刻は夜に入り闇の深まりも増したかに感ぜられる。庭の構いの板塀は見えないで、無限に地平に抜けている目途の闇が感じられる。小さな築山と木枝の茂みや、池と庭草は、電灯の光は受けても薄板金で張つたり、針金で輪廓を取つたりした小さなセツトにしか見えない。呑むことだけして吐くことを知らない闇。もし人間が、こんな怖ろしい暗くて鈍感な無限の消化力のようなものに捉えられたとしたならどうだろう。泣いても喚き叫んでも、追付かない、そして身体は毛氈苔に粘られた小虫のように、徐々に溶かされて行く、溶かされるのを知りつつ、何と術もなく、じーじー鳴きながら捉えられている。永遠に――。

鼈四郎はときどき死ということをおも見ないことはない。

彼が生み付けられた自分でも仕末に終えない激しいものを、せめて世間に理解して貰おうと彼は世間にうち衝つつて行く。世間は他人ひとごとどころではないと素気なく弾はね返す。彼はいきり立ち武者むし振りやぶついで行く。氣狂い染じみているとて今度は体を更かわされる。あの手この手。彼は世間から拒絶されて心身の髓すいに重苦しくてしかも薄うす痒がゆい疼うずきが残るだけの性せう抜きに草臥くたびれ果てたとき、彼は死を想い見るのだった。それはすべてを清算して呉くれるものであった。想い見た死に身を横よこえるとき、自分の生を眺め返せば「あれは、まず、あれだけのもの」と、あつさり諦あきらめられた。潔い苦笑が唇くちべに泛うかべられた。かかる死を時せつ想い見ないで、なんで自分自分のような激しい人間が三十に手の届く年齢にまでこの世に生き

永らえて来られようぞと彼は思う。

生を顧みて「あれは、まず、あれだけのもの」と諦めさすところの彼の想い見た死はまた、生をそう想い諦めさすことによつてそれ自らを至つて性の軽いものにした。生が「あれは、まず、あれだけのもの」としたなら、死もまた「これは、まず、これだけのもの」に過ぎなかつた。彼は<sup>げんがくてき</sup>銜学的な口を利くことを好むが、彼には深い思<sup>し</sup>惟<sup>い</sup>の素養も脳力も無い筈<sup>はず</sup>である。

これは全く押し詰められた体験の感じから来たもので、それだけにまた、動かぬものであつた。彼は少青年の頃まで、拓本の職工をしていたことがあるが、その拓本中に往々出て来る死生一如とか、人生一泡<sup>ほうさい</sup>滓<sup>さい</sup>とかいう文字をこの感じに於て解していた。

それ故にこそ、とどのつまりは「うまいものでも食って」ということになった。世間に肩肘張かたひじつて暮すのも左様大儀な芝居でもなかった。

だが、今宵こよいの闇の深さ、粘っこさ、それはなかなか自分の感じ捉えた死などという潔く諦めよいものとは違っていて、不思議な力に充みちている。絶望の空虚と、残忍な愛とが一つになっていて、捉えたものは嘗なめ溶し溶し尽きたら、また、原形に生み戻し、また嘗め溶す作業を永遠に、繰返さでは満足しない執拗しつようさを持っている。こんな力が世の中に在るのか。鼈四郎は、今迄、いろいろの食品を食むさり味ってみて、一つの食品というものには、意志と力があつてかくなりわい出たもののように感じていた。押お拡ひろげ

て食品以外の事物にも、何かの種類の意味で味いというものを帯びている以上、それがあのように思われている。だが、今宵の闇の味い！ これほど無窮無限と繰返しを象徴しているものは無かつた。人間が虫の好く好物を食べても食べても食べ飽きた気持ちがあったことはない。あの虫の好きと一路通ずるものがありはしないか。

これは天地の食慾とでもいうものではないかしらん、これに較べると人間の食慾なんて高が知れている。

「しまった」と彼はつぶや呟いてみた。

彼は久振りで、自分の嫌な過去の生い立ちを点検してみた。



京都の由緒ある大きな寺のひとり子に生れ幼くして父を失った。母親は内縁の若い後妻で入籍して無かつたし、寺には寺で法縁上の紛擾ぶんじょうがあり、寺の後董ごとうは思いがけない他所よその方から来てしまった。親子のものはほとんど裸同様で寺を追出される形となつた。これみな恬澹てんたんな名僧といわれた父親の世務をうるさがる性癖から来た結果だが、母親はどういうものか父を恨まなかつた。「なにしろこどものような方だったから罪はない」そしてたった一つの遺言ともいふべき彼が誕生したときいつたという父の言葉を伝えた。「この子がもし物ごころがつく時分とわしも老齡としじやから死んだるかも知れん。それで苦勞して、なんでこんな苦しい娖し

婆やばに頼みもせんにに生み付けたのだと親を恨むかも知れん。だがそのときはいつてやりなさい。こつちとて同じことだ、何でも頼みもせんにに親に苦勞をかけるようなこの苦しい娑婆に生れて出て来なすつたのだお互いさまだ、と」この言葉はとても薄情にとれた、しかし薄情だけでは片付けられない妙な響が鼈四郎の心に残された。

はじめは寺の弟子たちも故師の遺族に恩を返すため順番にめいの持寺に引取つて世話をした。しかしそれは永く続かなかつた。どの寺にもかかりゆうど寄食人を息詰らす家族というものがあつた。最後に厄介になつたのは父の碁敵であつた拓本職人の老人の家だつた。貧しいがやもめぐら鰥暮しなので気は楽だつた。母親は老人の家の

煮炊き洗濯の面倒を見てやり、彼はちょうど高等小学も卒業したので老人の元にほうじょう法帖造りの職人として仕込まれることになった。老人は変り者だった、碁を打ちに出るときは数日も家に帰らないが、それよりも春秋の頃おい小学校の運動会が始り出すと、彼はほとんど毎日家に居なかつた。京都の市中や近郊で催されるそれをあさ漁り尋ね見物して来るのだった。「今日の××小学校の遊戯はよく手が揃そろつた」とか、「今日の△△小学校のかけあし駄足競争で、今迄にない早い足の子がいた」とかうわさ噂して悦よろこんでいた。

その留守の間、彼は糊のり臭い仕事場で、法帖作りをやっているのだが、墨色に多少の変化こそあれせんしとう蝉翅搨うきんとうといったところで再び生物の上には戻つて来ぬ過去その

ものを色にしたような非情な黒に過ぎない。その黒へもって行つて寒白い空閑を抜いて浮出す拓本の字劃じかくというものは少年の鼈四郎にとつてまたあまりに寂しいものであつた。「雨降りあとじや、川へいて、雑魚ざこなど、取つて来なはれ、あんじよ、おいしゆう煮て、食べまひよ」継ものをしていた母親がいつた。鼈四郎は筧きびるを持って堤を越え川へ下りて行く。

その頃まだ加茂川にも小魚がいた。季節季節によつて、鮠ごり、川かわはぜ、鮎はや、鮠、雨降り揚句には鮒や鰻も浮出るとんだ獲ものもあつた。こちらの河原には近所の子供の一群がすでに漁り騒あそいでいる。むこうの土手では摘草の一家族が水ぎわまでも摘み下りている。鞍く馬らまへ岐わかれ路の堤の辺には日傘をさした人影も増えている。境遇に

負けて人臆れのする少年であつた鼈四郎は、これ等の人氣を避けて、土手の屈曲の影になる川の枝流れに、芽出し柳の参差を盾に、姿を隠すようにして漁つた。すみれ草が甘く匂う。糺の森がぼーつと霞んで見えなくなる。おや自分は泣いてるなど思つて眼瞼を閉じてみると、雫の玉がブリキ屑に落ちたかしてほとんとう音がした。器用な彼はそれでも少しの間に一握りほどの雑魚を漁り得る。持つて帰ると母親はそれを巧に煮て、春先の夕暮のうす明りで他人の家の留守を預りながら母子二人だけの夕餉をしたためるのであつた。

母親は身の上の素性を息子に語るのを好まなかつた。ただ彼女は食べ意地だけは張つていて、朝からでも少しのおなまぐさが無

ければ飯の箸は取れなかつた。その言訳のように彼女はこういつた。「なんしい、食べ辛棒の土地で気儘放題きままほうだいに育てられたもんやて！」

鼈四郎は母親の素性を僅わずかに他人から聞き貯めることが出来た。大阪船場目ぬきの場所にある旧舗しにせの主人で鼈四郎の父へ深く帰依きえしていた信徒があつた。不思議な不幸続きで、店は潰れ娘一人を残して自分も死病にかかつた。鼈四郎の父はそれまで不得手ながら金銭上の事に関つてまでいろいろ面倒を見てやったのだが、いにその甲斐かいもなかつた。しかし、すべてを過去の罪障のなす業と諦あきらめた病主人は、罪障消滅のためにも、一つは永年の恩義に酬むくゆるため、妻を失つてしばらく鰥やもめぐら暮しでいた鼈四郎べつしろうの父へ、

せめて身の周りの世話でもさせたいと、娘を父の寺へ上せて身罷みまかったという。他の事情は語らない母親も「お罪障消滅のため寺方に上った身が、食べ慾ぐらい断ち切れんで、ほんまに済まんと思うが、やっぱりお罪障の残りがあるかして、こればかりはしようもない」この述懐だけは亦ときどき口に洩もらしながら、最小限度のつもりにしろ、食べもの漁あさりはやめなかつた。

少青年の頃おいになつて鼈四郎は、諸方の風雅むしろの蕙むしろの手伝いに頼まれ出した。市民一般に趣味人をもつて任ずるこの古都には、いわゆる琴棋書画の会が多かつた。はじめ拓本職人の老人が出入りの骨董商こつとうしょうに展観の会があるのを老人に代つて手伝いに出たのがきつかけとなり、あちらこちらより頼まれるようになった。

才はじけた性質を人臆ひとおくしする性質が暈ぼかしをかけている若者は何か人目につくものがあつた。薄皮仕立で桜色の皮膚は下膨しもぶくれの顔から胸籠へかけて嫩葉わかばのような匂においと潤いを持っていた。それが拓本老職人の古風な着物や袴はかまを仕立て直した衣服を身につけて座を幹旋あつせんするさまざま趣味人の間には好もしかった。人々は戯れに千の与四郎、——茶祖の利休の幼名をもつて彼を呼ぶようになった。利休の少年時が果して彼のように美貌びぼうであつたか判らないが、少くとも利休が与四郎時代秋の庭を掃き浄きよめたのち、あらためて一握りの紅葉をもつて庭上に撒まき散らしたという利休の趣味性の早熟を物語る逸話から聯想れんそうして来ると与四郎は、彼のような美少年でなければならなかつた。与えられたこの戯名を彼も諾あまない



受け寧ろ少からぬ誇りをもつて自称するようにさえなつた。

洒落れたお弁当が食べられ、なにがしかずつ心付けの銭さえ貰えるこの手伝いの役は彼を悦ばした。そのお弁当を二つも貰つて食べ抹茶も一服よばれたのち、しばらくの休憩をとるため、座敷に張り廻らした紅白だんだらの幔幕を向うへ弾ね潜つて出る。そこは庭に沿つた椽側であつた。陽はさんさんと照り輝いて満庭の青葉若葉から陽の雫が滴っているようである。椽も遺憾なく照らし暖められている。彼はその椽に大の字なりに寝て満腹の腹を撫でさすりながらうとうとしかける。智恩院聖護院の昼鐘が、まだ鳴り止まない。夏霞棚引きかけ、眼を細めてでもいるよ  
うな和み方の東山三十六峯。ここの椽に人影はない。しかし別書

院の控室の間から演奏場へ通ずる中廊下には人の足音が地車でも続いて通っているよう絶えずとどろと鳴っている。その控室の方に当っては、もはや、午後の演奏の支度にかかっているらしく、尺八に対して音締めを直している琴や胡弓こきゆうの音が、音のこぼれもののように聞えて来る。間に混って盲人の鼻詰り声、娘たちの若い笑い声。

若者の鼈四郎は、こういう景致や物音に遠巻きされながら、それに煩わされず、逃れて一人うとうとする束の間つかまを楽しいものと思ない做した。腹に満ちた咀嚼物そしゃくぶつは陽のあたためを受けて滋味は油のように溶け骨、肉を潤し剩りあま今や身体の全面にまでにじみ出して来るのを艶つややかに感ずる。金目がかかり、値打ちのある肉体

になつたように感ずる。心の底に押籠おしこめられながら焦々した怒らしい想おもいはこの豊潤な肉体に対し、いよいよその豊潤を刺激して引立てる内部からの香辛料になつたような気がする。その快さ甘くときめかす匂い、芍薬しやくやく 焔くわんが庭のどこかにあるらしい。

古都の空は浅葱色あさぎいろに晴れ渡っている。和み合う暁まつげの間にか、充みち足りた胸の中にか白雲の一浮きが軽く渡つて行く。その一浮きは同時にうたた寝の夢の中にも通い、濡ぬれ色の白鳥となつて翼に乗せて過ぎる。はつ夏の哀愁。「与四郎さん、こんなところで寝てなはる。用事あるんやわ、もう起きていなあ、」鼻さきの尖を摘まれる。美しい年増夫人のやわらかくしなやかな指。

鼈四郎はだんだん家へ帰らなくなつた。貧寒な拓本職人の家で、

女めが餓鬼きの官女のような母を相手にみじめな暮しをするより、若い女のいる派手にぎやで賑かな会席を渡り歩るいてる方がその日その日を面白く糊塗ことできて気持よかつた。何か一筋、心のしんになる確りしつかした考え。何か一業、人に優れて身の立つような職能を捉えとらないでは生きて行くに危いという不安は、殊にあの心の底に伏つている焦いらいら々した怒ろしい想いに煽あおられると、居ても立つてもいられない悩みの焰ほのおとなつて彼を焼くのであるが、その焦熱を感じずれば感ずるほど、彼はそれをまわりで擦こすつて掻かき落すよう、いよいよ雑多と変化の世界へ紛れ込んで行くのであつた。彼はこの間に持つて生れた器用さから、趣味の技芸なら大概のものを田舎初段程度にこなす腕を自然に習い覚えた。彼は調法な与四郎となつた。

どの師匠の家でも彼を歓迎した。棋院では初心の客の相手役になつてやるし、琴の家では琴師を頼まなくても彼によつて絃げんの緩みは締められた。生花の家でお嬢さんたちのための花の下慥え、茶の湯の家ではまたお嬢さんや夫人たちのための点茶や懐石のよき相談相手だった。拓本職人は石刷りを法ほうじょう帖ていに仕立てる表具師のようなこともやれば、石刷りを版木に模刻して印刷をする彫版師のような仕事もした。そこから自ずから彼は表具もやれば刀を採つて、木彫篆てんこく刻くの業もした。字は宋拓を見よう見真似みまねに書いた。画は彼が最得意とするところで、ひよつとしたら、これ一い途ちずに身を立てて行こうかとさえ思うときがあつた。

頼めば何でも間に合あわして呉くれる。こんな調法人をどこで歓迎

しないところがあるろうか。

彼は紛れるともなく、その日その日の憂さを忘れて渡り歩いた。母は鼈四郎が勉強のため世間に知識を漁あさっていて今に何か掴つかんで来るものと思ひ込んでるので呑のみ込み顔で放つて置いたし、拓本職人の老爺ろうやは仕事の手が欠けたのをこぼしこぼし、しかし叱言こごとというほどの叱言はいわなかった。

師匠連や有力な弟子たちは彼を取巻のようにして瓢亭・俵やはじめ市中の名料理へ飲食に連れて行つた。彼は美食に事欠かぬのみならず、天稟てんぴんから、料理の秘奥を感取つた。

そうしているうち、ふと鼈四郎に気が付いて来たことがあつた。このように諸方で歓迎されながら彼は未だ嘗かつて尊敬というものを

されたことがない。大寺に生れ、幼時だけにしろ、総領息子という格に立てられた経験のある、旧舗しんせの娘として母の持てる氣位を伝えてゐるらしい彼の持前は頭の高い男なのであつた。それがただ調法の与四郎で扱ひ済されるだけでは口惜しいものがあつた。彼の心の底に伏つていつも焦々する怒ろしい想いもどうやら一半はそこから起るらしく思われて来た。どうかして先生と呼ばれてみたい。

人中もに揉まれて臆おくごころし心はほとんど除かれている彼に、この衷心から頭を擡もたげて来た新しい慾望は、更に積極へと彼に拍車をかけた。彼は高飛車に人をこなし付ける手を覚え、軽蔑けいべつして鼻であしろう手を覚えた。何事にも批判を加えて己れを表示する術すべも覚

えた。彼はなりの恰好かつこうさえ肩肘かたひじを張ることを心掛けた。彼は手鏡を取出してつくづく自分を見る。そこに映り出る青年があまりに若く美しくして先生と呼ばれるに相応ふさわしい老成した貫禄が無いことを嘆いた。彼はせめて言葉附だけでもいかつく、ませたものにしようと骨を折った。彼の取って付けたような豹ひょう変へんの態度に、弱いものは怯おびえて敬遠し出した。強いものは反撥はんぱつして罵ののった。「なんだ石刷り職人の癖に」そして先生といつて呉れるものは料理人だけだった。

「与四郎は変った」「おかしゆうならはった」というのが風雅社会の一般の評であつた。彼の心地に宿つた露草の花のようないじらしい恋人もあつただけけれども、この噂うわさに脆もろくも破れて、実を



得結ばずに失せた。

若者であつて一度この威猛いたげだか高な誇張の態度に身を任せたものは二度と沈潜して肌質きめをこまかくするのは余程難しかった。鼈べつし

四郎ろうはこの目的外れの評判が自分のどこの辺から来るものか自分自身に向つて知らないとはいいい徹せなかつた。「学問が無いからだ」この事實は彼に取つて最も痛くていまましい反省だつた。そして今更に、悲運な境遇から上の学校へも行けず、秩序立つた勉強の課程も踏めなかつた自分を憐あわれむのであつた。しかしこれを恨みとして、その恨みの根を何処へ持つて行くのかとなると、それはまたあまりに多岐わたに亘り複雑過ぎて当時の彼には考え切れなかつた。嘆くより後れ走おせでも秘ひそかに学んで追いつくより仕方が

ない。彼はしきりに書物を読もうと努めた。だが才氣とカンと苦  
勞で世間のあらまはしは、すでに結論だけを摘み取つてしまつてい  
る彼のような人間にとつて、その過程を煩わしく諄く記述してあ  
る書物というものを、どうして迂遠で悪丁寧とより以外のもの  
に思い倣されようぞ。彼は頁を開くとすぐ眠くなつた。それは努  
めて読んで行くとその索寞さに頭が痛くなつて、しきりに喉  
頭へ味なるものが恋い慕われた。彼は美味な食物を漁りに立上  
つてしまつた。

結局、彼は遣り慣れた眼学問、耳学問を長じさせて行くより仕  
方なかつた。そしていま迄、下手に謙遜に学び取つていた仕方  
は今度からは、争い食つてかかる紛擾の間に相手から挽ぎ取

る仕方に方法を替えたに過ぎなかった。それほどまでにして彼は尊敬なるものを贏<sup>か</sup>ち得たかつたのであろうか。然<sup>しか</sup>り。彼は彼が食味に於て意識的に人生の息抜きを見出す以前は、実に先生といわれる敬称は彼に取つて恋人以上の魅力を持つていたのだつた。彼はこの仕方によつて数多の旧知己をば失つたが、僅<sup>わず</sup>かばかりの変りものの知遇者を得た。世間には唾<sup>いが</sup>み合う鑼<sup>どら</sup>、振り合う銅<sup>ねじ</sup> 鋏<sup>にようばち</sup>のような騒々しいものを混えることに於て、却<sup>かえ</sup>つて知音や友情が通じられる支那樂のような交際も無いことはない。鼈四郎が向き嵌<sup>はま</sup>つて行つたのはそういう苦勞胼<sup>たこ</sup>胝で心の感膜が厚くなつてゐる年長の連中であつた。

その頃、京極でモダンな洋食店のメーゾン檜垣の主人もその一

人であつた。このアメリカ帰りの料理人は、妙に芸術や芸術家の生活に渴仰をもつていて、店の監督の暇には油画を描いていた。

寝泊りする自分の室は画室のようになつていた。彼は客の誰彼を掴

えてはニューヨークの グリーンウイッチビル리지 文士村の話をした。巴里の芸術

街を真似まねようとするこの街はアメリカ人気質と、憧憬による誇張

によつて異様で刺激的なものがあつた。主人はそれを語るのに使

徒のような情熱をもつてした。店の施設にもできるだけ応用した。

バツカス 酒神の祭の夕。 あおろうそく 青蠟燭の部屋、新しいものに牽ひかれる青年や、

若い芸術家がこの店に集つたことは見易き道理である。この古都

には若い人々の肺には重苦しくて せきりよう 寂寥だけの空氣があつた。

これを撥はね除のけ攪かき壊すには極端な反撥はんぱつが要つた。それ故、一

般に東京のモダンより、上方のモダンの方が調子外れで薬が強いとされていた。

鼈四郎はこの店に入浸るようになった。お互いに基礎知識を欠く弱味を見透すが故に、お互いに吐き合う気焰きえんも圧迫感を伴わなかつた。飄々ひょうひょうとカンのまま雲に上り空に架することができた。立会いに相手を傲慢ごうまんで呑んでかかつてから軽蔑けいべつの齒を剥出むきだして、意見を噛かみ合わす無遠慮な談敵を得て、彼等は渾身こんしんの力が出し切れるように思った。その間に狡ずるさを働かして耳学問を盗み合い、挽ひぎ取る利益も彼等には歛よろこびであった。鼈四郎が東洋趣味の幽玄こうしやうを高嘯こうしやうするに對し、檜垣の主人は西洋趣味の生々なまなましさを誇つた。かかるうち知識は交換されて互いの薬籠やくろうちゆう中に収

められていた。

いつでも意見が一致するのは、芸術至上主義の態度であつた。誤つて下層階級に生い立たせられたところから自恃じじに相応わしい位置にまで自分を取戻すにはカンで攀よじ登れる芸術と称するもの以外には彼等は無いと感じた。彼等は鑑識の高さや広さを誇つた。この点ではお互いに許し合つた。琴棋書画、それから女、芝居、陶器、食もの、思想に互わたるものまでも、分け距へだてなく味い批評できる彼等をお互いに褒め合つた。「僕らは、天才じゃね」「天才じゃねえ」

檜垣の主人は、胸の病持ちであつた。彼が独身生活を続けるのも、そこから来るのであつたが、情慾は強いかして彼の描く茫ぼうば

漠とした油絵にも、雑多に蒐められる蒐集品にも何かエ  
 ロチックの匂いがあった。痩せて青黒い隈の多い長身の肉体は内  
 部から慾求するものを充し得ない悩みにもいつも喘いでいた。それ  
 に較べると中背ではあるが異常に強壯な身体を持つている鼈四郎  
 はあらゆる官能慾を貪るに堪えた。ある種の嗜慾以外は、貪り能  
 う飽和点を味い締められるが故に却つて恬淡になれた。

檜垣の主人は、鼈四郎を連れて、鴨川の夕涼みのゆかから、宮  
 川町辺の赤黒い行灯のかけに至るまで、上品や下品の遊びに連  
 れて歩るいた。そこでも、味い剩すがゆえにいつも暗鬱な未練  
 を残している人間と、飽和に達するがゆえに明色の恬淡に冴る人  
 間とは極端な対象を做した。鼈四郎は檜垣の主人の暗鬱な未練に

対し、本能の浅間しさと共に本能の深さを感じ、檜垣の主人は鼈四郎の肉体に対して嫉妬しつとと驚異を感じた。二人は心こころ秘ひそかに「あいつ偉い奴じゃ」と互いに舌を巻いた。

起伏表裏がありながら、また最後に認め合うものを持つ二人の交際は、縄のように絡み合い段々その結ぼれを深めた。正常な教養を持つ世間の知識階級に対し、脅威を感じずるが故に、睥睨へいげいしようとする職人上りで頭が高い壮年者と青年は自らの孤独な階級に立籠たてこもつて脅威し来るものを罵ののる快を貪るには一あつて二無き相手だった。彼等は毎日のように会わないでは寂しいようになつた。

鼈四郎は檜垣の主人に対しては対蹠たいしよてき的に、いつも東洋芸術の



幽邃ゆうすい 高遠こうえんを主張して立向う立場に立つのだが、反噬はんぜいして来る檜垣の主人の西洋芸術なるものを、その範とするところの名品の複写などで味わされる場合に、躊躇ちゆうちよなく感得されるものがあつた。檜垣の主人が持ち帰つたのは主にフランス近代の巨匠のものだったが、本能を許し、官能を許し、享受を許し、肉情さえ許したものであることは東洋の躰しつけと道徳の間から僅にそれ等を垣か間見いまさせられていたものに取つては驚きの外無かつた。恥も外聞も無い露むき出しで、きまりが悪いほどだった。「こいつ等は、まるで素人じゃねえ、」鼈四郎は檜垣の主人に向つてはこうも押えた口を利くようなものの、彼の肉体的感覚は発言者を得たように喝采かつさいした。

彼はこの店へ出入りをして食べ増した洋食もうまかつたし、主人によつていろいろ話して聴かされた西洋の文化的生活の様式も、便利で新鮮に思われた。

鼈四郎はこれ等の感得と知識をもつて、彼の育ちの職場に引返して行つた。彼は書画に携る輩やからに向つてはデッサンを説き、ゴッホとかセザンヌとかの名を口にした。茶の湯生花の行われる巷ちまたに向つては、テイパーテイの催しを説き、アペリチーフの功德を説き、コンポジションとかニューアンスとかいう洋名の術語を口にした。

東洋の諸芸術にも実践上の必需から来る自らなるそれ等にあつて、ただ名前と伝統が違つていただけだつた。それゆえ、鼈四郎

のいうことはこれ等に携る人々にもほぼ察しはつき、心ある者は、なんだ西洋とてそんなものかと嵩たかを括くくらせはしたが当時モダンの名に於て新味と時代適応性を西洋的なものから採入れようとする一般の風潮は彼の後姿に向つては「葵あおいまつり祭まつりの竹の欄干てすりで」青く擦すれてなはると蔭口を利きながら、この古都の風雅の社会は、彼の前に廻まわつては刺激と思ひ付を求めねばならなかつた。彼の人気は恢かいふく復した。三曲の演奏にアンコールを許したり、裸体彫像に生花を配したり、ずいぶん突飛なことも彼によつて示唆されたが、椅子いすテーブルの点茶式や、洋食を緩和して懷石の献立中に含めることや、そのときまで、一部の間にしか企てられていなかつた方法を一般に流布せしめる椽えんの下のの力持とはなつた。彼は、ところ

どころで「先生」と呼ばれるようになった。

彼はこの勢を駆つて、メーゾン檜垣に集る若い芸術家の仲間  
割り込んだ。彼の高飛車と粗雑はさすがに、神経のこまかいイン  
テリ青年たちと肌合ひの合わないものがあつた。彼は彼等を吹き  
靡<sup>なび</sup>け、煙に巻いたつもりでも最後に、沈黙の中で拒まれているコ  
ツンとしたものを感じた。それは何とも説明し難いものではある  
が彼をして現代の青年の仲間入りしようとする勇気<sup>と</sup>を無雑作に取<sup>と</sup>  
拉<sup>りひ</sup>ぐ薄気味悪い力を持っていた。彼は考えざるを得なかつた。

春の宵であつた。檜垣の二階に、歓迎会の集りがあつた。女流  
歌人で仏教家の夫人がこの古都のある宗派の女学校へ講演に頼ま  
れて来たのを幸、招いて会食するものであつた。画家の良人<sup>おと</sup>も一

しよに来ていた。テーブルスピーチのようなこともあつさり切上がり、内輪くつろで寛いだ会に見えた。しかし鼈べつしろう四郎にとつてこの夫人に対する気構えは兼々雑誌などで見て、納らぬものがあつた。芸術をやるものが宗教に捉とらわれるなんて——、夫人が仏教を提唱することは、自分に幼時から辛い目を見せた寺や、境遇の肩を持つもののようにも感じられた。とうとう彼は雑談の環の中から声を皮肉にして詰なつた。夫人が童女のままで大きくなつたような容よ貌うぼうも苦勞なしに見えて、何やら苛いじめ付けたかつた。

夫人はちよつと無礼なといった面持をしたが、怒りは嚙のみ込のんでしまつて答えた、「いいえ、だから、わたくしは、何も必要のない方にやれとは申上ちやおりません」鼈かき四郎は嵩かさにかかつて食

つてかかったが、夫人は「そういう聞き方をなさる方には申上られません」と繰返すばかりであつた。世間知らずの少女が意地を張り出したように鼈四郎にはとれた。

一時白けた雰囲氣の空虚も、すぐまわりから歓談で埋められ、苦り切り腕組をして、不満を示している彼の存在などは誰も気付かぬようになった。彼の怒りは縮れた長髪みなぎの先にまでも漲みなぎつたかと思われた。その上、彼を拗こじらすためのようこじに、夫人は勧められて「京の四季」かなにかを、みんなの余興の中に加うたつて唄うたつた。低めて唄つたもののそれは暢のびやかで楽しそうだった。良人の画家も列座と一しよに手を叩たたいている。

すべてが自分に対する侮蔑ぶべつに感じられてならない鼈四郎は、ど

んな手段を採つてもこの夫人を圧服し、自分を認めさせようと決心した。彼は、檜垣の主人を語つて、この画家夫妻の帰りを待ち捉え、主人の部屋の画室へ、作品を見に寄つて呉れるよう懇請した。その部屋には鼈四郎の制作したのも数々置いてあつた。

彼は遜る態度を装い、強いて夫人に向つて批評を求めた。そこには額仕立ての書画や篆額があつた。夫人はこういうものは好きらしく、親し気に見入つて行つたが、良人を顧みていった。

「ねえ、パパ、美しくできてるけど、少し味に傾いてやしない？」  
良人は氣の毒そうにいった。「そうだなあ、味だな」鼈四郎は哄笑して、去り気ない様子を示したが、始めて人に肺腑を衝かれた氣持がした。良人の画家に「大陸的」と極めをつけられてよ

いのか悪いのか判わからないが、気に入った批評として笑窪えくぼに入った  
檜垣の主人まで「そういえば、なるほど、君の芸術は味だな」と  
相槌あいづちを打つ苦々しさ。

鼈四郎は肺腑を衝かれながら、しかもう一度執拗しつように夫人へ  
反撃を密謀した。まだ五六日この古都に滞在して春のゆく方を見み  
巡めぐつて帰るといふ夫妻を手料理の昼食に招いた。自分の作品を無  
雑作に味と片付けてしまうこの夫人が、一体、どのくらいその味  
なるものに鑑識を持っているのだろう。食もので試してやるのが  
早手廻はやてまわしだ。どうせ有閑夫人の手に成る家庭料理か、料理屋の  
形式的な食品以外、真のうまいものは食ってやしまい。もし彼女  
に鑑識が無いのが判ったなら彼女の自分の作品に対する批評も、



惧れるに及ばないし、もし鑑識あるものとしたなら、恐らく自分の料理の技倆ぎりょうに頭を下げて感心するだろう。さすればこの方で夫人は征服でき、夫人をして自分を認め返さすものである。

幸に、夫妻は招待に応じて来た。

席は加茂川の堤下の知れる家元の茶室を借り受けたものであった。彼は呼び寄せてある指導下の助手の料理人や、給仕の娘たちを指揮して、夫妻の饗宴きょうえんにかかった。

彼はさきの夜、檜垣の歓迎会の晩餐ばんさんにて、食事のコース中、夫人が何を選び、何を好み食べたか、すっかり見て取っていた。ときどき聞きもした。それは努めてしたのではないが、人の嗜慾しよくに対し間諜かんちようけん犬のような嗅覚きゆうかくを持つ彼の本能は自ずと働い

ていた。夫人の食品の好みは専門的に見て、素人なのだか玄人なのだか判らなかつた。しかし嗜求する虫の性質はほぼ判つた。

鼈四郎は、献立の定慣や和漢洋の種別に関係なく、夫人のこの虫に向つて満足さす料理の仕方をした。ああ、そのとき、何という人間に対する哀愛の気持が胸の底から湧き出たことだろう。そこにはもう勝負の気もなかつた。征服慾も、もちろんない。

あの大きな童女のような女をして眼を瞠みはらせ、五感から享うけ入れる人の世の満足以上のものを彼女をして無邪氣に味い得しめたなら料理それ自身の手柄だ。自分なんかの存在はどうだつてよい。彼はその気持から、夫人が好きだといつた、季節外れの蟹かにを解したり、一口蕎麦そばを松江風に捏こねたりして、献立に加えた。ふと幼

いとぎ、夜泣きして、瘡かんの虫の好く、宝来豆ほうらいまめというものを欲しがったとき老僧の父がとぼとぼと夜半の町へ出て買って来て呉れたときの気持を想おもい出した。鼈四郎は捏ね板へ涙の雫しずくを落すまいとして顔を反向けた。所詮しよせん、料理というものは労いたわりなのであるうか。そして労りごころを十二分に發揮できる料理の相手は、白痴か、子供なのではあるまいか。

しかし鼈四郎は夫人が通客であつた場合を予想し、もしその眼で見られても恥しからぬよう、坂本の諸子川の諸子魚もろことか、鞍馬の山椒皮からかわなども、逸いちはや早く取寄せて、食品中に備えた。

夫人は、大事そうに、感謝しながら食べ始めた。「この子附なますけの美しいこと」「このえびいも諸の肌目きめこまかく煮えてますこと」

それから唇にから揚の油が浮くようになってからは、ただ「おいしいわ」「おいしいわ」というだけで、専心に喰べ進んで行く。

鼈四郎は、再び首尾はいかがと張り詰めていたものが食品の皿が片付けられる毎に、ずしんずしんと減って、気の衰えをさえ感ずるのだった。

夫人も健啖けんたんだったが、画家の良人はより健啖だった。みな残

りなく食べ終り、煎茶せんちやぢやわん茶碗を取上げながらいった。「ご馳走ちそう

さまでした。御主人に申すが、この方が、よつぽど、あんたの芸

術だね」そして夫人の方に向い、それを皮肉でなく、好感を持つ

批評として主人に受取らせるよう夫人の註解ちゆうかいした相槌あいづちを求

めるような笑い方をしていた。夫人も微笑したが、声音こわねは生真面きまじ

目<sup>め</sup>だった。「わたくしも、警句でなく、ほんとにそう思いますわ。立派な芸術ですわ。」

鼈四郎は凶星に嵌<sup>は</sup>めたと思うと同時に、ぎくりとなった。彼はいかにふだん幅広い口を利こうと、衷心では料理より、琴棋書画に位があつて、先生と呼ばれるに相<sup>ふ</sup>応<sup>さ</sup>わしい高級の芸種であるとする世間月並の常識を無<sup>な</sup>みしようもない。その高きものを前日は味とされ、今日低きものに於て芸術たることを認められた。天分か、教養か、どちらにしろ、もはや自分の生涯の止めを刺された気がした。この上、何をかいおうぞ。

加茂川は、やや水<sup>み</sup>嵩<sup>ず</sup>増<sup>か</sup>して、ささ濁りの流勢は河原の上を八<sup>や</sup>千<sup>ち</sup>岐<sup>また</sup>に分れ下へ落ちて行く、蛇籠<sup>じ</sup>に阻<sup>か</sup>まれる花芥<sup>あ</sup>の渚<sup>くた</sup>の緑の色

取りは昔に變りはないけれども、魚は少くなつたかして、漁る子あき供の姿も見えない。堤の芽出し柳の煙れる梢こずえに春なかばの空は晴れみ曇りみしている。

しばらく沈黙の座に聞澄そうそうしている。涼々とした川音は、座をそのままなつかしい国へ押し移す。鼈べつしろ四郎は、この川下の対岸に在つて大竹原で家棟は隠れ見えないけれども、まさしくこの世に一人残っている母親のことを思い出す。女め餓鬼がきの官女のような母親はそこで食味に執しながら、一人息子が何でもよいたつきの業を得て帰つて来るのを待っている。しばらく家へは帰らないが、拓本職人の親方の老人は相変らず、小学校の運動会を漁り歩き遊戯をする児童たちのいたいけな姿に老いの迫るを忘れようと努め

ているであろうか。

鼈四郎は、笑いに紛らしながら、幼時、母子二人の夕餉ゆうげの菜のために、この河原で小魚を掬すくい帰った話をした。「いままで、ずいぶん、いろいろなうまいものも食いましたが、いま考えてみると、あのととき母が煮て呉くれた雑魚ざこの味ほどうまいと思つたものにも食い当りません」それから彼は、きよう、料理中に感じたことも含めて、「すると、味と芸術の違いは労いたりがあるわと、無いとの相違でしょうかしら」といった。

これに就つき夫人は早速に答えず、先ず彼等が外遊中、巴里パリの料理店フオイヨで得た経験を話した。その料理店の食堂は、扉の合せ目も床の敷ものも物音立てぬよう軟い絨じゆうたん氈たんや毛織物で用

意された。色も刺激を抜いてある。天井や卓上の燭光も調節してある。総ては食味に集中すべく心が配られてある。給仕人はイゴとか男性とかいういかついものは取除かれた品よく晒さらされた老人たちで、いずれはこの道で身を滅した人間であろう、今は人が快樂することによつて自分も快樂するという自他移心の術に達してするように見ゆる。食事は聖せい餐さんのような厳かさ、ランデブウのようなしめやかさで執り行われて行く。今やテーブルの前には、はつ夏の澄める空を映すかのような薄浅黄色のスープが置かれてある。いつの間に近寄つて来たか給仕の老人は輪切りにした牛骨の載れる皿を銀盤で捧げて立っている。老人は客が食指を動し来る呼吸に坩つぼを合せ、ちよつと目礼して匙さじで骨の中から髓を掬い上



げた。汁の真中へ大切に滑り浮す。それは乙女の娘きし生のようのこころを玉に凝らしたかのよう、ぶよぶよ透けるが中にいささか青春の潤うるみによどみでいる。それは和食の鯛の眼肉あつものの羹あつものにでも当る料理なのであろうか。老人は恭しく一礼して数歩退いて控えた。いかに満足に客がこの天の美漿びしやうを啜すい取るか、成功を祈るかのよう敬けい虔いけんに控えている。もちろん料理は精製されてある。サービスは満点である。以下デザートを終えるまでのコースにも、何一つ不足と思えるものもなく、いわゆる善尽し、美尽しで、感嘆の中に食事を終えたことである。

「しかしそれでいて、私どもにはあとで、嘗なめこくられて、扱扱い廻まわされたという、後口に少し嫌なものが残されました。」

「面と向つて、お褒めするのも氣まりが悪うございますから、あんまり申しませんが、そういつちや何ですが、今日の御料理には、ちぐはぐのところがございますけれど、まことというものが徹しているような氣がいたしました。」

意表な批評が夫人の口から次々に出て来るものである。料理に向つてまことなぞという言葉を使ったのを鼈四郎は嘗て聞いたこととはない。そして、まこと、まごころ、こういうものは彼が生れや、生い立ちによる拗すねた心からその呼名さえ耳にすることに反感を持つて来た。自分がもしそれを持つたなら、まるで、変り羽毛の雛ひなどり鳥のように、それを持たない世間から寄つて蝟たかつて突き苛いじめられてしまふではないか。弱きものよ汝なんじの名こそ、まこと。

自分にそういうものを無<sup>な</sup>みし、強くあらんがための芸術、偽りに堪えて慰ま<sup>な</sup>んための芸術ではないか。歌人の芸術家だけに旧<sup>ふる</sup>臭<sup>くさ</sup>く否<sup>いや</sup>味<sup>み</sup>なことをいう。道徳かぶれの女学生でもいいそんな芸術批評。歯<sup>し</sup>牙<sup>が</sup>に懸<sup>か</sup>けるには足りない。

鼈四郎はこう思<sup>た</sup>つて来ると夫妻の権威は眼中に無<sup>な</sup>くなって、肩<sup>か</sup>肘<sup>たひじ</sup>がむくむくと平常通り聳<sup>そび</sup>え立<sup>た</sup>つて来るのを覚<sup>さ</sup>えた。「はははは、まこと料理ですかな」

車<sup>くるま</sup>が迎<sup>むか</sup>えに来て、夫妻は暇<sup>いとま</sup>を告<sup>つ</sup>げた。鼈四郎はこれからどちらへと訊<sup>き</sup>くと、夫妻は壬<sup>みづ</sup>生<sup>う</sup>寺<sup>でら</sup>へお詣<sup>ま</sup>りして、壬<sup>みづ</sup>生<sup>う</sup>狂<sup>きやう</sup>言<sup>ごん</sup>の見<sup>み</sup>物<sup>ぶつ</sup>にと答<sup>こた</sup>えた。鼈四郎は擲<sup>や</sup>揄<sup>ゆ</sup>して「善<sup>ぜん</sup>男<sup>なん</sup>善<sup>ぜん</sup>女<sup>にょ</sup>の慰<sup>い</sup>安<sup>あん</sup>には持<sup>も</sup>つて来<sup>き</sup>い<sup>い</sup>です<sup>す</sup>ね」とい<sup>い</sup>うと、ちよ<sup>ち</sup>つと眉<sup>まゆ</sup>を顰<sup>ひそ</sup>めた夫人<sup>ふじん</sup>は「あれをあなたは、そうお

とりになりますの、私たちは、あの狂言のでんがんでんがんという単調な鳴物を地獄の音楽でも聞きに行くように思つて参りますのよ」といふと、良人おつとの画家も、実は鼈四郎の語気に気が付いて癢しやくに触つたらしく「君おれたちは、善男善女でもこれで地獄は一遍たつぷり通つて来た人間たちだよ。だが極楽もあまり永く場塞ばいさいぎしては濟まないと思つて、また地獄を見付けに歩るいていとところだ。そう甘くは見なさるなよ」と窺たしなめた。夫人はその良人の肘をひいて「こんな美しい青年を咎とがめ立するもんじゃありませんわ。人間の芸術品が壊れますわ」自分のいったことを興がるのか、わつわと笑つて車の中へ駈かけ込んだ。

鼈四郎はその後一度もこの夫妻に会わないが、彼の生涯に取つ

てこの春の二回の面会は通り魔のようなものだった。折角設計して来た自分らしい楼閣を不逞ふていの風が浚さらい取った感じが深い芸術な  
るものを通して何かあるとは感づかせられた。しかし今更、宗教  
などという黴かびくさ臭いと思われるものに関する気はないし、そうかと  
いって、夫人のいったまこととかまごころとかいうものを突き詰  
めて行くのは、安道学らしくて身慄みふるいが出るほど、怖気おぞけが振えた。  
結局、安心立命するものを捉とらえさえしたらいいのだろう。死の外  
にそれがあるか。必ず来て総てが帳消しされる死、この退のつ引びきな  
らないものへ落付きどころを置き、その上での生きてるうちが花  
という気持で、せいぜい好きなことに殉じて行つたなら、そこに  
出て来る表現に味とか芸術とかの岐わかれの議論は立つまい。「いざ

となれば死にさえすればいいのだ」鼈四郎は幼い時分から辛い場合、不如意な場合には逃れずさまよい込み、片息をついたこの無可有の世界の観念を、青年の頭脳で確しかと積極的に思想に纏まとめ上げたつもりでいる。これを裏書するように檜垣の主人の死が目前に見本を示した。

檜垣の主人は一年ほどまえから左のうしろ頸くびに癌がんが出はじめた。始めは痛みもなかった。ちよつと悪性のものだから切らん方がよいという医師の意見と処法に従つてレントゲンなどかけていたが、癌は一時小さくなつて、また前より脹はれを増した。とうとう痛みが来るようになった。医者も隠し切れなくなつたか肺臓癌はいぞうがんがここに吹出したものだと宣告した。これを聞いても檜垣の主人は驚

かなかつた。「したいと思つたことでできなかつたこともあるが、まあ人に較べたらくらずいぶんした方だろう」「この辺で節季の勘定を済すかな」笑いながらそういつた。それから身の上の精算に取りかかつた。店を人に譲り総ての貸借関係を果すと、少しばかり余裕の金が残つた。「僕は賑かなにぎやなところで死にたい」彼はそれをもつて京極の裏店に引越した。美しい看護婦と、気に入りのモデルの娘を定まつた死期までの間の常備じょうやといにして、そこで彼は彼の自らしい「天才の死」の営みにかかつた。

売り惜んだ彼が最後に気に入りの蒐集品しゅうしゅうひんで部屋の中を飾つた。それでも狭い部屋の中は一ぱいで猶太人ユダヤじんの古物商の小店ほどはあつた。

彼はその部屋の中に彼が用いつけの天蓋てんがい附のベッドを据えた。もちろん贗にせものであるが、彼はこれを南北戦争時分にアメリカへ流浪した西班牙スペイン王属出の吟遊詩人が用いたものだといっていた。柱にラテン文字で詩は彫付けてあるにはあつた。彼はそこで起上つて画を描き続けた。

癌がんはときどき激しく痛み出した。服用の鎮痛剤ぐらいでは利かなかつた。彼は医者いしやに強請せがんで麻痺薬まひやくを注射して貰う。身体が弱るからとてなかなか注さして呉くれない。全身、蒼あおくろ黒くなりその上、瘦やせさらばう骨の窪くぼみの皮膚にはうす紫の隈くままで、漂い出した中年過ぎの男は脹はれ嵩張かさばったうしろ頸くびの瘤こぶに背を跼くぐめられ侏儒しゅじゆにして餓鬼がきのようである。夏の最中さなかのこととて彼は裸裸でいるので、そ



の見苦しきは覆うところなく人目を寒気立した。痛みが襲つて来ると彼はその姿でベッドの上で踞もがき苦しむ。全身に水を浴びたよう脂汗をにじみ出し長身の細い肢体を振ねじらし擦り合せ、甲斐かいない痛みを扱こき取ろうとするさまは、蛇が難産をしているところか나ぞのように想像される。いくら認め合つた親友でも、鼈べつしろう四郎は友の苦しみを看護みとすることは好まなかつた。

苦しみなぞというものは自分一人のものだけでさえ手に剩あまつてゐる。殊に不快ということは人間の感覚に染しみ付き易いものだ。芸術家には毒だ。避けられるだけ避けたい。そこで鼈四郎は檜垣の病主人に苦悶くもんが始まる、と、すーつと病居を抜け出て、茶を飲んで来るか、喋しゃべつて来るのであつた。だが病友は許さなくなつた。

「なんだ意気地のない。しつかり見とれ、かく成り果てるとまた痛快なもんじゃから——」息を喘<sup>あえ</sup>がせながらいった。

鼈四郎は、手を痛いほど握り締め、自分も全身に脂汗をにじみ出させて、見ることに堪えていた。死は惧<sup>おそ</sup>ろしくはないが、死へ行くまでの過程に嫌なものがあるという考えがちらりと念頭を掠<sup>かす</sup>めて過ぎた。だがそういうことは病主人が苦悶を深め行くにつれ却<sup>かえ</sup>って消えて行つた。あまりの惨<sup>いた</sup>ましさに痺<sup>しび</sup>れてぼかんとなくなつてしまつた鼈四郎の脳底に違つたものが映り出した。見よ、そこに蠢<sup>うごめ</sup>くものは、もはやそれは生物ではない。埃<sup>エジプト</sup>及のカタコンブから掘出した死蟻<sup>しろろう</sup>であるのか、西<sup>チベット</sup>蔵の洞窟<sup>どうくつ</sup>から運び出した乾<sup>かんら</sup>酪<sup>く</sup>の屍<sup>したい</sup>体であるのか、永くいのちの息吹きを絶つた一つの物質

である。しかも何やら律動しているところは、現代に判<sup>わか</sup>らない巧妙繊細な機械仕掛けが仕込まれた古代人形のようにでもある。蒼黒く燻<sup>くす</sup>んだ古代人形はほぼ一定の律動をもつて動く、くねくね、きゅーつぎゅつと跳いて、もくと伸び上る。頰<sup>くずお</sup>れて、そして絶息するようになふーむと唸く。同じ事が何度も繰返される。モデル娘は惨ましさに泣きかけた顔をおかしさで歪<sup>ゆが</sup>み返させられ、妙な顔になつて袖<sup>そで</sup>から半分覗<sup>のぞ</sup>かしている。看護婦は少し怒りを帯びた深刻な顔をして団扇<sup>うちわ</sup>で煽<sup>あお</sup>いでいる。

鼈四郎は氣付いた。病友はこの苦しみの絶頂にあつて遊ぼうとしているのだ。彼は痛みに対抗しようとする肉体の自らなる跳き、必死とリズムを与えて踊りに慥<sup>たしか</sup>えているのだ。そうすること

が少しでも病痛の紛らかしになるのか、それとも友だちの、ふだんいう「絶倫の芸術」を自分に見せようため骨を折っているのか。病友はまた踊る、くねくね、ぎゅーっ、きゅ、もくんもくんそして頹れ絶息するようにふーむと唸く。それは回教徒の祈祷きとうの姿に擬しつつ実は、聞えて来る活動館の安価な楽隊の音に合わせているのだった。

鼈四郎が、なお愕おどろいたことは、病友は、そうしながら向う側の壁に姿見鏡を立てかけさせ、自分の悲惨な踊りを、自ら映しみて効果を味っていることだった。映像を引立たせる背景のため、鏡の縁の中に自分の姿と共に映し入るよう、青い壁絨つぼと壺つぼに夏花までベッドの傍に用意してあるのだった。鼈四郎に何か常識的な怒

りが燃えた。「病人に何だつて、こんなばかなことをさしとくの  
だ」鼈四郎はモデルの娘に当つた。モデル娘は「だつて、こちら  
が仰おつしやるんですもの」と不服そうにいつた。病友はつまらぬ咎とが  
め立をするなど窘たしなめる眼付をした。

三度に一度の願いが叶かなつて医者に注射をして貰つたときには病  
友は上機嫌で、へらりへらり笑つた。食欲を催して鼈四郎に何を  
作れかにを作れと命じた。

葱ねぎとチーズを壺つぼ焼やきにしたスープ・ア・ロニオンとか、  
牛オックス

舌タンゲのハヤシライスだとか、莢アリコベル隠元アのベリグレット・ソース  
のサラダとか、彼がふだん好んだものを註ちゆうもん文ぶんしたので鼈四郎

は慥あひるえ易かつた。しかし家鴨あひるの血を絞つてその血で家鴨の肉を煮

る料理とか、大鰻をぶつ切りにして酢入りのゼリーで寄る料理とかは鰻四郎は始めてで、ベッドの上から病友に差図されながらもなかなか加減は難しかった。家鴨の血をアルコールランプにかけた料理盤で掻かき混ぜてみると上品なしる粉ほどの濃さや粘りとなつた。これを塩胡椒しおこしょうし、家鴨の肉の截片を入れてちよつと煮込んで食べるのだが、鰻四郎は味見をしてみるのに血生臭ちなまぐさいことはなかつた。巴里パリの有名な鴨料理店の家の芸の一つでまず凝つた鰻ぜいたく沢料理に属するものだと言病友はいつた。鰻の寄せものは伊太イタ利移民リアの貧民街などで辻つじうり売している食品で、下層階級の食べものだといった。うまいものではなかつた。病友はそれらの食品にまつわる思い出でも楽しむのか、慥たしかえてやつてもろくに食べもし

ないで、しかし次々にふらふらと思ひ出しては註文した。鴨のな  
い時期に、鴨に似た若い家鴨を探したり、夏長けて莢は硬ばつて  
しまった中からしなやかな莢さや隠元いんげんを求めたり鼈四郎は、走り廻まわつ  
た。病友はまたずっと溯さかのぼつた幼時の思ひ出を懐しもうとするのか、  
フライパンで文字焼を焼かせたり、炮烙ほうろくで焼芋を作らせたりし  
た。

これ等を鼈四郎は、病友が一期の名残りと思えばこそ奔走して  
も望みを叶えさしてやるのだが、病友はこれ等を娛たのしみ終りまだ  
薬の気が切れずに上機嫌の続く場合に、鼈四郎を遊び相手に勞わづらわす  
のにはさすがの鼈四郎も、病友が憎くなつた。病友は鼈四郎にう  
しろ頸に脹れ上つて今は毬まりが覗のぞいているほどになつてゐる癌の瘤

へ、油絵の具で人の顔を描けというのである。「誰か友だちを呼んで見せて、人面疽じんめんそが出来たと巫山戯ふざけてやろう」鼈四郎が辞んでも彼は訊入れききいなかつた。鼈四郎は洩々筆を執つた。繻帶ほうたいを除くとレントゲンの光線焦やけと塗り薬とで鱧皮色わにがわいろになつていうずたかかいものの中には執拗しつような反人間の意志の固りが秘められているように思われる。内側からしんの繁凝しんごりが円味を支え保ち、そしてその上に程よい張度の肉と皮膚が覆つている腫物はれものは、鋭いメスをぐさと刺し立てたい衝動と、その意地張つた凝り固りには、ひよぐつて擲揄やゆしてやるより外に術はないという感じを与えられる。腫物の皮膚に油絵の具のつきはよかつた。彼は絵の具を介して筆ひ尖つせんでこの怪物の面を押し擦るタッチのうちに病友がいかにかこの



腫物を憎んだか。そして憎み剩った末が、悪戯いたずらごころに気持をはぐらかさねばならないわけが判るような気がした。「思い切り、人間の、苦痛というものをばかにした顔に描いてやれ、腫物とは見えない人の顔に」彼は、人の顔らしく地塗りをし、隈取りくまどをし、鼻、口、眼と描き入れかけた。病友はここまで歯を食い縛って我慢していたが、「た た た た」といつて身体をすさらせた。彼はいった。「さすがに堪たまらん、もう、ええ、あとはたれか痛みの無くなった死骸しがいになってから描き足して呉くれ」それゆえ、腫物の上に描いた人の顔は瞳ひとみは一方しか入れられずに、しかも、ずっている。鼈四郎は病友がいった通り、彼が死んでからも顔を描き上げようとはしなかった。隻眼すがめを眇にらみながら哄こ

うしよう  
笑 している 模造人面疽もぞうじんめんその顔は、ずった偶然によつて却かえつて  
意味を深めたように思えた。人生の不如意を、諸行無常を眺めや  
る人間の顔として、なんで、この上、一点の描き足しを付け加え  
る必要がある。

鼈四郎は病友の屍したい体の肩かたさき尖すみに大きく覗のぞいている未完成の顔を  
つくづく見み睜みり「よし」と独りいって、屍体を棺に納め、共に焼  
いてしまったことであつた。

病友に痛みの去る暇なく、注射は続いた。流動物しか摂とれなく  
なつて、彼はベッドに横わり胸を喘ぐだけとなつた。鼈四郎は、  
それが夜店の膾おつとせ膾せい獣売りの看板である膾膾獣の乾物に似ている  
ので、人間も変れば変わるものだと思ふだけとなつた。病友は口か

ら入れるものは絶ち、苦痛も無くなつてしまつたらしい。医者は臨終は近いと告げた。看護婦もモデルの娘も涙の眼をしょぼしょぼさせながら帰り支度の始末を始め出した。病友は朦々として眠つていのか覚めていのか判らない場合が多い。けれども咽のど奥でどおく呟つぶやくような声がしているので鼈べつしろう四郎が耳を近付けてみると、唄うたを唄うたっているのだつた。病友がこういう唄を唄うたつたことを一度も鼈四郎は聞いたことはなかつた。覺おぼつか束つかない節を強いて聞分けてみると、それは子守唄だつた。「ねんころりよ、ねんころりねんころり」

鼈四郎の顔が自分に近付いたのを知つて病友は努めて笑つた。そして喘あえぎ喘あえぎという文句の意味を理解に綴つづつてみるとこういうの

だった。「どこを見渡してもさっぱりしてしまつて、まるで、何にもない。いくら探しても遺身かたみの品におまえにやるものが見付からないので困つた。そうそう伯母さんが東京に一人いる。これは無くならないでまだある。遠方にうすくぼんやり見える。これをおまえにやる。こりやいいもんだ。やるからおまえの伯母さんにしなさい。」

病友は死んだ。店の旧取引先か遊び仲間の知友以外に京都には身寄りらしいものは一人も無かつた。東京の伯母なるものに問合せと、年老いてることでもあり葬儀万端しか然るべくという返事なので鼈四郎は、主に立って取仕切り野辺の煙りにしたことであつた。

その遺骨を携えて鼈四郎は東京に出て来た。東京生れの檜垣の主人はもはや無縁同様にはなっているようなものの菩提寺ぼだいじと墓地は赤坂青山辺に在った。戸主のことではあり、ともかく、骨は菩提寺の墓に埋めて欲しいという伯母の希望から運んで来たのであったが、鼈四郎は東京のその伯母の下町の家に落付き、埋葬も終えて、序ついでにこの巨都も見物して京都に帰ろうとする一ヶ月あまりの間に、鼈四郎はもう伯母の擒とりことなっていた。

この伯母は、女学校の割かつぼうきょうし 烹教師かえ 師上りで、草創時代の女学校としてその他家政に属する課目は何くれとなく教えていた。時代後れとなつて学校を退かされてもこれが却かえつて身過ぎの便りとなり、

下町の娘たちを引受けて嫁入り前の躰しつけをする私塾を開いていた。伯母も身うちには薄倖はっこうの女で、良人おっとには早く死に訣わかれ、四人ほどの子供もだんだん欠けて行き、末の子の婚期に入ったほどの娘が一人残つて、塾の雑事を賄まかなっていた。貧血性のおとなしい女で、伯母に叱しかられては使い廻まわされ、塾の生徒の娘たちからは姉さんと呼ばれながら少しばかりにされている気味があつた。何かいわれると、おどおどしているような娘だつた。

伯母はむかし幼年で孤児となつた甥の檜垣の主人を引取り少年の頃まで、自分の子供の中に加えて育てたのであつたが、以後檜垣の主人は家を飛出し、外国までも浮浪さまよい歩るいて音信不通であつたこの甥に対し、何の愛憎も消え失うせているといつた。しかし、

このまま捨置くことなら檜垣の家は後嗣絶えることになるといった。

甥の檜垣の家が宗家で、伯母はその家より出て分家へ嫁に行つたものである。伯母はいつた、自分の家は廃家しても関わぬ、しかし檜垣の宗家だけは名目だけでも取留めたい。そこで相談である。もし「それほど嫌でなかつたら——」自分の娘を娶つて呉れて、できた子供の一人を檜垣の家に与え、家の名跡だけで復興させて貰い度い。さすれば自分に取つては宗家への孝行となるし、あなたにしても親友への厚い志となる。「第一、貰つて頂き度い娘は、檜垣に取つてたつた一人の従兄弟女である。これも何かのご縁ではあるまいか。」

始めこの話を伯母から切出されたときに鼈四郎は一笑に附した。あの颯々<sup>ようよう</sup>として芸術<sup>ざんまい</sup>三昧に飛揚して没<sup>う</sup>せた親友の、音楽が済み去つたあとで余情だけは残るものその<sup>きじ</sup>木地は実は空間であると同じような妙味のある片付き方で終つた。その病友の生涯と死に対し、伯母の提言はあまりに月並な世俗の義理である。どう矧<sup>は</sup>ぎ合<sup>あ</sup>わしても病友の生涯の継ぎ伸ばしにはならない。伯母のいう末の娘とて自分に取り何の魅力もない。「そんなことをいつたつて——」鼈四郎はひよんな表情をして片手で頭を抱えるだけであつたが、伯母の説得は間<sup>すき</sup>がな隙<sup>ゆる</sup>がな弛<sup>ゆる</sup>まなかつた。「あなたも東京で身を立てなさい。東京はいいところですよ」といつて、鼈四郎の才能を鑑<sup>かん</sup>検し、急<sup>き</sup>ぎ螢雪館はじめ三四の有力な家にも小使



取りの職仕を紹介してこの方面でも鼈四郎を引留めるいかり錨を結びつけた。伯母は螢雪館が下町に在った時分姉娘のお千代を塾で引受けて仕込んだ関係から螢雪とは昵じっこん懇の間柄であつた。

何という無抵抗無性格な女であろうか。鼈四郎は伯母の末の娘で檜垣の主人の従いとこ姉妹に当るこの逸子という女の、その意味での非凡さにもやがてから擱め捕られてしまった。鼈四郎のような生活のさまつ些末の事にまで、タイラントの棘とげが突出している人間に取り、性抜きかえの薄綿のような女は却つて引懸り包くるまれ易い危険があつたのだつた。鼈四郎の世間に対する不如意の気持から来る八つ当りは、横暴ないい付けとなつて手近かのものへ落ち下る。彼女はいつもびつくりした愁い顔で「はいはい」といい、  
 中ちゆうごし腰 駈かけあし足でそ

の用を足そうと努める。自分の卑屈な役割は一度も顧ることなしに、また次の申付けをおどおどしながら待受けているさまは、鼈四郎には自分が電気を響かせるようで軽蔑しながら氣持がよいようになつた。世を誑のろい剩あまつて、意地悪く吐出す罵倒や嘲ちやうしやう笑の鋒ほこぎ尖を彼女は全身に刺し込まれても、ただ情無く我慢するだけ、苦鳴の声さえ聞取られるのに憶している。肌目きめがこまかいだけが取得の、無味で冷たく弱々しい哀愁、焦じれもできない馬鹿正直さ加減。一方、伯母は薄笑いしながら説得の手を緩めない。鼈四郎としては「何の」と思いながら、逸子が必要な身の廻りのものとなつた。結婚同様の關係を結んでしまった。ずるずるべつたりに伯母の望む如く、鼈四郎は、東京居住の人間となり逸子を妻

と呼ぶことにしてしまった。そして檜垣の主人が死ぬ前に讒言うわごとにいった「伯母をおまえにやる。おまえの伯母にしろ」といった言葉が筋書通りになった不思議さを、ときどき想い見るのであった。

京都に一人残っている生みの母親、青年近くまで養ってくれた拓本の老職人のことも心にかからないことはないけれども、鼈四郎の現在ののような境遇には、彼等との関係はもとの因縁が深いだけに、それを考えに上すことは苦しかった。この撥ぜ開けた巨都の中で一旗揚げる欲望に燃え盛って来た鼈四郎に取り、親友でこそあれ、他人の伯母さんを伯母さんと呼ぶぐらいの親身さが抜き差しができて責任が軽かった。責任感が軽くて世話をして呉

れる老女は便利だった。しかし生きてるうちは好みに殉じ死に向つてはこれを遊戯視して、一切を即興詩のように過したかに見えた檜垣の主人が謔言の無意識でただ一筋、世俗的な糸をこの世に曳き遺し、それを友だちの自分に絡みつけて行つて、しかもその糸が案外、生あたたかく意味あり気なのを考えるのは嫌だった。

伯母が世話をして呉れた下町の三四の有力な家の中で、鼈四郎は螢雪館の主人に一ばん深く取入ってしまった。

螢雪館の主人は、江戸っ子漢学者で、少壮の頃は、当時の新思想家に違いなかった。講演や文章でかなり鳴した。油布の支那服なぞ着て、大陸政策の会合なぞへも出た。彼の説は時代遅れとなり妻の変死も原因して彼は公的のものと一切関係を断ち、売れそ

うな漢字辞典や、受験本を書いて独力で出版販売した。当たつたその金で彼は家作や地所を買入れ、その他にも貨殖の道を講じた。彼は小富豪になつた。

彼は鰥やもめで暮もっていた。姉のお千代に塾をひかしてから主婦の役をさせ、妹のお絹は寵ちようあいぶつ愛物あいぶつにしていた。蛍雪の性癖も手伝い、この学商の家庭には檜垣の伯母のようなもの以外出入りの人物は極めて少かつた。新来とはいへ蛍雪に取つて鼈べつしろう四郎しろうは手に負えない清新な怪物であつた。琴棋書画等趣味の事にかけては大概のことの話相手になれると同時に、その話振りは思わず熱意をもつて蛍雪を乗り出させるほど、話の局所局所に、逆説的な弾機を仕掛けて、相手の気分にはバウンドをつけた。中でも食味については

鼈四郎は、実際に食品を作つて彼の造詣ぞうけいを証拠立てた。偏屈人  
に対しては妙に心理洞察の坎のある彼は、食道楽であるこの中  
老紳士の舌を、その方面から暗そらんじてしまつて、嗜慾しよくをピアノの  
鍵板けんばんのように操つた。鰥暮しで暇のある螢雪は身体の中で脂肪  
が燃えでもするようにフウフウ息を吐きながら、一日中炎天の下  
に旅行用のヘルメットを冠かぶつて植木鉢の植木を剪きり噴さいんだり、飼  
ものに凝つたり、猟奇的な蒐集しゆうしゆうぶつ物に浮身やっを侷やっしたりした。  
時には自分になまじい物質的な利得ばかりを与えながら昔日の尊  
敬を忘れ去り、学商呼ばわりする世情を、氣狂いのようになつて  
悲憤慷慨ひふんこうがいすることもある。そんな不平の反動も混つて螢雪の喰た  
べものへの執し方が激しくなつた。

蛍雪が姉娘のお千代を世帯染しよたいじみた主婦役にいたためつけながら、  
 妹のお絹に当世の服装みなりの贅ぜいを尽させ、芝の高台のフランススカトリ  
 ヅクの女学校へ通わせてほくほくしているのも、性質からしてお  
 絹の方が気に入つてゐるには違ひないが、やはり、物事を極端に偏  
 らせる彼の凝り性の性癖から来るものらしかった。彼は鼈四郎が  
 来るまえから鼈すつぽんの料理に凝り出していたのだが、鼈すつぽん鍋なべはどう  
 やらできたが、鼈蒸むし焼やきは遣り損じてばかりいるほどの手並だつ  
 た。鼈四郎は白木綿で包んだ鼈を生埋めにする熱灰を拵こしらえる薪の  
 選み方、熱灰の加減、蒸し焼き上る時間など、慣れた調子で苦も  
 なくしてみせ、蛍雪は出来上つたものをむし拵むしつて生醬油きじょうゆで食べる  
 と近来にない美味であつた。それまで鼈四郎は京都で呼び付けら

れていた与四郎の名を通していたのだが、以後、蛍雪は与四郎を相手させることに凝り出し、手前勝手に鼈四郎と呼名をつけてしまった。娘の姉妹もそれについて呼び慣れてしまう。独占慾の強い蛍雪は、鼈四郎夫妻に住宅を与え僅わずかに食べられるだけの扶養を与えて他家への職仕を断らせた。

鼈四郎は、蛍雪館へ足を踏み入れ妹娘のお絹を一目見たときから「おやつ」と思った。これくらい自分とは縁の遠い世界に住む娘で、そしてまたこれくらい自分の好みに合う娘はなかった。いつも夢見ているあどけない恰好かこうをしていて、そしてかすかに皮肉な苦味を帯びている。青ものの走りが純粹無垢むくでありながら、何か挽もぎ取られた将来の生い立ちを不可解の中に蔵している一つの



權威、それにも似た感じがあつた。

お絹は人出入稀まれな家庭に入つて来た青年の鼈四郎を珍しがりもせず、ときどきは傍にいても、忘れたかのように、うち捨てて置いたまま、ひとりで夢見たり、遊んだりした。母無くして権高な父の手だけで育つたためか、そのとき中性型で高貴性のある寂しさがにじんだ。鼈四郎が美貌びぼうであることは最初から頓とんちやく着しないうようだった。姉娘のお千代の方が顔を赭あからめたり戸惑う様子を見せた。

鼈四郎は絹に向うと、われならなくに一層肩肘かたひじを張り、高飛車に出るのをどうしようもない。その心底を見透すもののようにまたそうでもないように、ふだん伏眼勝ちの煙れる瞳ひとみをゆつくり

上げて、この娘はまともに青年を瞳入るのであった。すると鼈四郎は段違いという感じがして身の卑しさに心が竦んだ。

だが、鼈四郎は、蛍雪の相手をする傍ら、姉妹娘に料理法を教えることをいい付かり、お絹の手を取るようにして、仕方を授ける間柄になって来ると、鼈四郎は心易いものを覚えた。この娘も料理の業は普通の娘同様、あどけなく手緩かった。それは着物の綻びほころから不用意に現している白い肌のように愛らしくもあった。彼は娘の間の抜けたところを悠々と味いながら叱りしかもし罵りののしもできた。お絹はこういうときは負けていず、必ず遣り返したが、この青年の持つ秀でた技倆ぎりようには、何か関心を持って来たようだった。鼈四郎は調子づき、自己吹聴がてら彼の芸術論など喋った。

遠慮は除れた。しかしただそれだけのものであつた。この娘こそ虫が好く虫が好くと思ひながら、鼈四郎は、逸子との変哲もない家庭生活に思わず月日を過し子供も生れてしまった。もう一人檜垣の家の後嗣あとつぎに貰はずえる筈の子供が生れるのを伯母さんは首を長くして待受けている。

今宵こよひ、霧の夜の、闇やみの深さ、粘りこさにそそられて鼈四郎は珍らしく、自分の過ぎ来た生涯を味い返してみた。死をもつて万事清算がつく絶対のものと思ひ定め、それを落付きどころとして、その無からこの生を顧り、須臾しゅゆの生なにほどの事やあると軽く思

い做なされるころから、また死を眺めやってこれも軽いものに思  
い取る。幼児の体験から出発して、今日までに思想にまで纏まとめ上  
げたつもりの考え。

しかる上は生きてるうちが花と定めて、できることなら仕度したい  
三昧さんまいを続けて暮そうという考えは、だんだんあやしくなつて来  
た。何一つ自分の思うこととてできたものはない。たつた一つこ  
れだけは漁あさり続けて来たつもりの食味すら、それに纏まつわる世俗の諸  
事情の方が多くて自分を意外の方向へ押流し、使い廻まわす挺てこにでも  
なっているような気がする。

霰あられが降る。深くも、粘り濃い闇の中に。いくら降つても降り白  
められない闇を、いつかは降り白められでもするかと、しきりに

降り続けている。

夜も更けたかして、あたりの家の物音は静り返り、表通りを通る電車の轟きとどろだけがときどき響く。隣の茶の間で寝付いたらしい妻は、ときどき泣こうとする子供を「おとうさんがおとうさんが」と囁ささやいて乳房で押して黙らせ、またかすかな寢息を立てている。鼈四郎が家にいる間は、気難しい父を憚はばかり、母のいうこの声を聞くと共に、子供は泣きかかっても幼ごころに齒を食い縛り、我慢をする癖を鼈四郎は今宵はじめて憐あわれに思った。没なくなつた父の老僧は、もし子供が不如意を託かこつて「なぜ、こんな世の中に自分を生んだか」と、父を恨むような場合があつたら、「こつちが頼みもしないのに、なぜ生れた。お互いさまだ。」と聞いて聞かせと、

母にいい置いたそうだが、今宵考えてみれば、亡父は考え抜いた末の言葉のようにも思える。子供にも彼自身に知られぬ意志がある。

お互いさまでわけが判らぬ中に、父は自分を遺し、自分はこの子を遺している。父のそのいい置きを伝えた母は、また、その実家の罪滅しのためとて、若い身空ですべての慾情を断つたつもりでも、食意地だけは断たれず、嘆きつつもそれを自分の慾情の上に伝えている。少年の頃、自分がうまいものをよそで饗よばれて帰って話すとき、母は根掘り葉掘り詳しく聞き返し、まるで自分が食べでもしたような満足さで顔を生々とさしたではないか。そして自分が死水を取ってやった唯一の親友の檜垣の主人は、結局そ

の姪を自分に妻あわして、後嗣の胤たねを取ろうとする仕掛を、死の断末魔の無意識中にあつさり自分に伏せている。こう思つて来ると、世の中に自分一代で片付くものとは一つも無い。自分だけで成せたと思うものは一つもない。みな亡父のいうお互いさまで、続かり続け合っている。はじめて気の付くのは、いつぞや京都の春で、二回会つたきりの画家と歌人夫妻のいつた言葉だ。「おれたちは、極楽の場ばふさ塞げを永くするのも済まないと思つて、地獄の席を探しているところだ」と。そうしてみると、せんせいたちもこの断ち切れないお互いのものには、ぞつこん苦勞した連中かな。夫人のいった、まこと、まごころというものも、安道徳のそれではなくて一癖も二癖もある底の深い流れにあるらしいものを指す

のか。それは何ぞ。

夜はしんしんと更けて、いよいよ深みまさり、粘り濃く潤う闇やみ。無限の食慾をもつて降る霰あられを、下から食い貪りむさぼ飽くことを知らない。ひよつと見方を変えれば、永遠に、霰を上から吐きに吐くとも見える。ひつきよう食いつつ吐きつつ食いつつ飽き足るということを知らない闇。こんな逞たくましい食慾を鼈べつしろう四郎はまだ嘗かつて知らなかった。死を食い生を吐くものまたかくの如きか。

闇に身を任せ、われを忘れて見詰めていると闇に艶つやかなものがある。あつて、その潤いと共に、心をしきりに弄なぶられるような気がする。お絹？ はてな。これもまた何かの仕掛かな。

大根のチリ鍋は、とつくに煮詰つて、鍋底なべぞこは潮干の湯あくたに芥が



残っているようである。台所へ出てみると、酒屋の小僧が届けたと見え、ビールが数本届いていた。それを座敷へ運んで来て、鼈四郎は酒に弱い癖に今夜一夜、霰の夜の闇を眺めて飲み明そうと決心した。この逞しい闇に交際つきあつて行くには、しかし、「とても、大根なぞ食つちやおられん。」

彼は、穩に隣室へ声をかけた。

「逸子、濟まないが、仲通りの伊豆庄を起して、鮫鱈あんどこうの肝か、もし皮剥かわはぎの肝が取つてあるようだったら、その肝を貰つて来て呉れ、先生が欲しいといえばきつと、呉れるから——」

珍しく丁寧に頼んだ。はいはいと寢惚ねぼけ声で答えて、あたふた逸子が出て行く足音を聞きながら、鼈四郎は焔炉こんろに炭を継ぎ足し

た。傾ける顔に五十燭しよくの球の光が当たるとき、  
で見たことの無い露が一粒光った。 鼈四郎まぶたの瞼まぶたには今ま

# 青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第5巻」小学館

1986（昭和61）年12月1日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第五巻」冬樹社

1974（昭和49）年12月10日初版第1刷発行

※疑問箇所の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

入力：阿部良子

校正：松永正敏

2004年1月30日作成

2013年10月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 食魔

岡本かの子

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>